

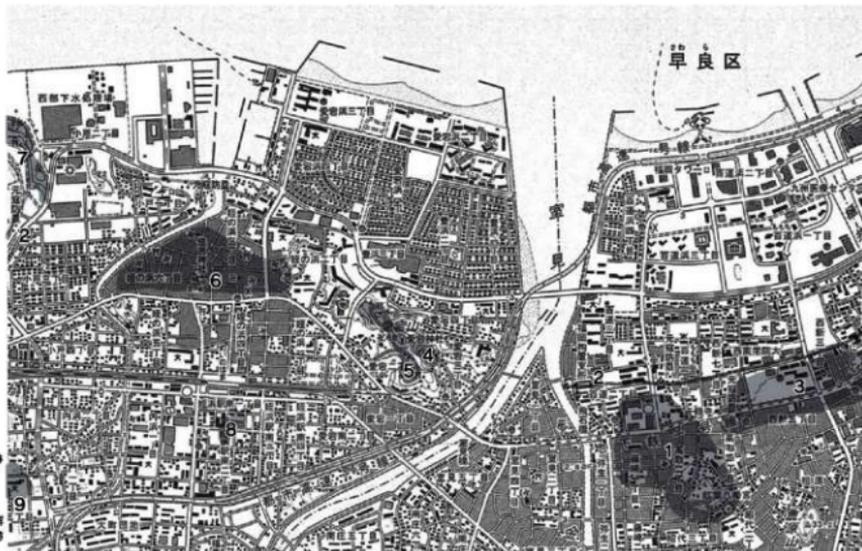
藤崎遺跡 19

—藤崎遺跡第37次調査報告—

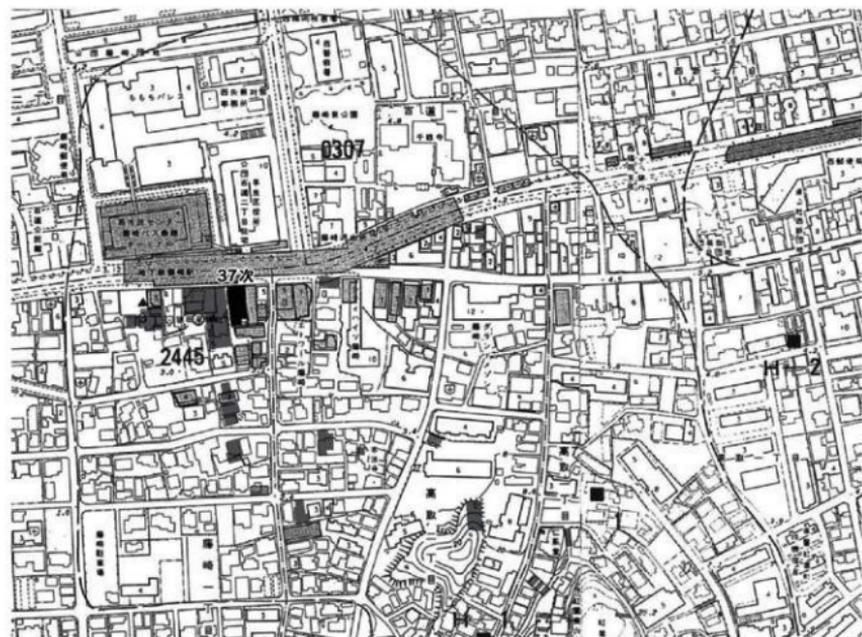
福岡市埋蔵文化財調査報告書1240集

2014

福岡市教育委員会



第1図 周辺遺跡分布図 (1/2500)



第2図 調査地点位置図 (1/4000)

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも早良区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する藤崎遺跡の発掘調査報告書は共同住宅建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代前期から近代まで連続と続く集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例言

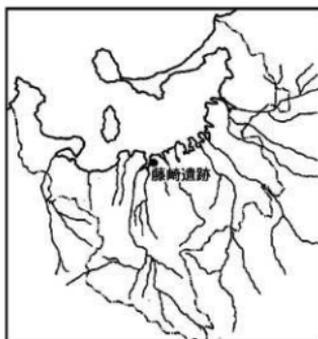
- 本報告書は早良区藤崎1丁目9番の共同住宅建設工事に伴って2012年6月10日から9月14日にかけて発掘調査を行った藤崎遺跡第37次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋が担当した。
- 遺構の実測と写真撮影は屋山が、遺物実測と製図等を濱石正子・屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡X V - 陶磁器分類編 - (2000年)太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	1207	遺跡番号	0307	分布地図番号	NO81 室見
調査地番	福岡市藤崎1丁目9番				
開発面積	502㎡	調査面積	358㎡	調査原因	共同住宅建設
調査期間	20120610～20120914		担当者	屋山 洋	

藤崎遺跡 19

—藤崎遺跡第37次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書1240集



遺跡略号 FUJ-37
調査番号 1207

2014

福岡市教育委員会

本文目次

I はじめに	1	3)石棺墓	24
II 調査の記録	3	4)方形周溝墓	24
1. 調査の経緯	3	5)溝	26
2. 調査の概要	3	6)土坑	26
3. 遺構と遺物	5	7)井戸	32
1) 竪棺	5	8)高取焼き面透遺構と遺物	35
2) 竪横墓	24	9)その他の遺物	36
		4. 小結	36

挿図目次

第1図 川辺遺跡分布図(1/25,000)	2
第2図 調査地点位置図(1/4,000)	2
第3図 調査区位置図(1/300)	3
第4図 調査区全体図(1/120)	4
第5図 ST004-010遺構実測図(1/20)	6
第6図 ST004-010遺物実測図(1/10)	7
第7図 ST013-014-017遺構実測図(1/20)	8
第8図 ST014-017遺物実測図(1/10-0008は1/4)	9
第9図 ST018-048-049遺構実測図(1/20)	12
第10図 ST013-018-048-049遺物実測図(ST018は1/10-0015は1/4-その他1/6)	13
第11図 ST032-094-095遺構実測図(1/20)	14
第12図 ST032-094-095遺物実測図(1/10)	15
第13図 ST099-104遺構・遺物実測図(1/20-1/6)	16
第14図 ST114遺構・遺物実測図(1/20-1/6)	17
第15図 ST120遺構・遺物・ST121-122遺物実測図(1/20-1/6-0034は1/10)	18
第16図 ST121-122-134遺構実測図(1/20)	19
第17図 ST135-142遺構実測図(1/20)	20
第18図 ST134-135-142遺物実測図(1/10)	21
第19図 SK062-SK084遺構・遺物実測図(1/20-1/30-1/4)	23
第20図 溝・遺構・遺物実測図(1/60-1/30-1/4-0052は1/2)	25
第21図 土坑実測図1(1/40)	27
第22図 土坑実測図2(1/40)	28
第23図 土坑実測図3(1/40)	29
第24図 井戸遺構実測図(1/60)	31
第25図 井戸出土遺物実測図(1/4)	32
第26図 西壁土層実測図	33
第27図 SK061出土遺物実測図(1/4)	33
第28図 その他の遺物実測図1(1/4)	34
第29図 その他の遺物実測図2(1/4)	35

図版目次

図版1 1. I区(東から) 2. II区(東から)	2.ST004(西から)	3.ST004下墓(南から)
図版2 1. III区(北から) 2. IV区(西から)	5.ST010(東から)	6.ST010下墓(南から)
図版3 1. I区竪棺出土状況(東から)	8. III区全墳(北から)	3.ST014(南から)
4. ST004人骨出土状況(南から)	2.ST013(西から)	3.ST017人骨出土状況(南から)
7. ST010下墓(東から)	5.ST014人骨出土状況(北から)	6.ST018下墓(南から)
図版4 1.ST013(北から)	2.ST017下墓(北から)	6.ST018副葬小墓出土状況(西から)
4.ST014下墓(北から)	5.ST018副葬小墓出土状況(西から)	8.ST032(南から)
図版5 1.ST017(北から)	6.ST018下墓(南から)	8.ST094(北から)
4.ST018(北から)	7.ST017下墓(北から)	5.ST095(西から)
7.ST018人骨出土状況(北から)	8.ST018副葬小墓出土状況(西から)	6.ST095出土状況(南から)
図版6 1.ST048(7)-049(西から)	8.ST032(南から)	3.ST094(北から)
4.ST094下墓(北から)	5.ST094(7)-ST095(北から)	6.ST095出土状況(南から)
7.ST099(東から)	8.ST095(西から)	
図版7 1.ST104(西から)	5.ST099下棺(東から)	
5.ST114下掘方(東から)	2.ST104(東から)	3.ST114出土状況(東から)
図版8 1.ST121(真側)ST122出土状況(西から)	6.ST120(東から)	8.ST120下棺(東から)
4.ST134-135-142出土状況(西から)	2.ST121(西から)	3.ST122(西から)
7.ST135下墓(南から)	5.ST134(南から)	6.ST135(南から)
図版9 1.ST142(南西から)	8.ST135人骨出土状況(南から)	
5.SK084(東から)	2.ST142掘方(南西から)	3.SK062(東から)
図版10 1.SD019東壁土層(西から)	6.SD029(北から)	4.ST062(西から)
5.SD075上層(西から)	2.SD019西壁土層(東から)	7.SD029土層(東から)
図版11 1.SK038(東から)	3.SD071(東から)	8.SD029遺物出土状況
5.SK117(東から)	6.SK061(南から)	4.SD075(東から)
図版12 1. II区西壁土層(東から)	2.SK041(東から)	7.SK070(西から)
4.SF001井筒(北から)	6.SK118土層(南東から)	3.SK111(北東から)
	2. II区南側(東から)	4.SK112土層(南東から)
	5.SF002(東から)	7.SK119(北から)
		3.SE001(西から)
		8.SK156土層(西から)

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成 24 年(2012 年)3月 21 日付けで福岡市教育委員会埋蔵文化財第 1 課(現埋蔵文化財審査課)に早良区藤崎 1 丁目 9 番の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書(23-2-1127)が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である藤崎遺跡の中に位置し、周囲でも多くの地点で発掘調査が行われていることから埋蔵文化財第 1 課では建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることが必要であると判断して協議を行った。その結果平成 24 年 6 月 11 日から 9 月 14 日の期間で発掘調査を行った。

調査期間中は休憩所や水道の設置など原因者及び関係者各位の多大なご協力を頂いた。記して感謝したい。

2. 調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会(発掘調査 平成 24 年度 : 整理報告 平成 25 年度)

調査統括 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 課長 宮井善朗

同課調査第 1 係長 常松幹雄(発掘調査)

同課調査第 2 係長 榎本義嗣(整理報告)

庶務 埋蔵文化財審査課管理係 川村啓子

調査担当 埋蔵文化財調査課 屋山 洋

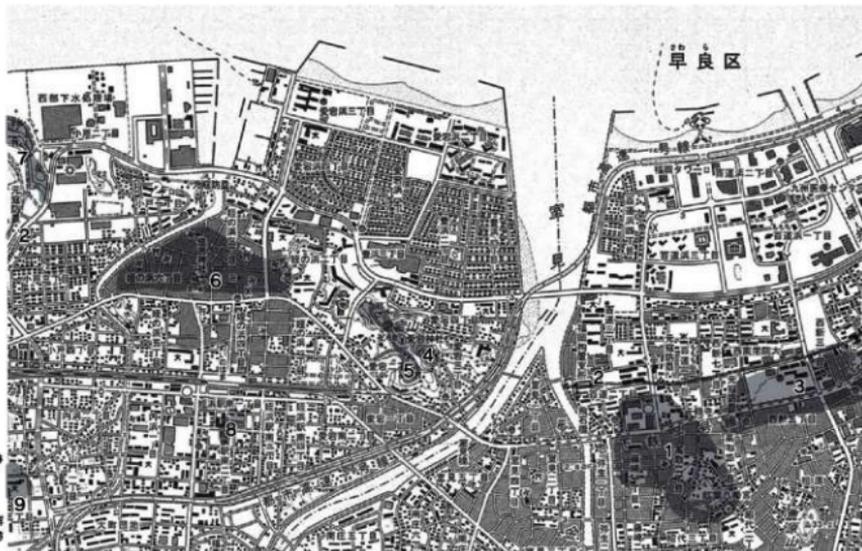
作業員 田中昭子 山田ヤス子 高橋茂子 真田功二 岡部安正 芹川淳子 河原明子 三角チエ子
三角章夫 中村健三 竹内武俊 安東昌信 小田義之 安部みゆき 内野信代 篠原俊夫
宮原豊 大坂布由子 樋口知則 井上稔子 河野隆章 浦仲英 中村桂子 吹春憲治
梶原慎司

整理作業 坂口龍子

3. 遺跡の立地と環境

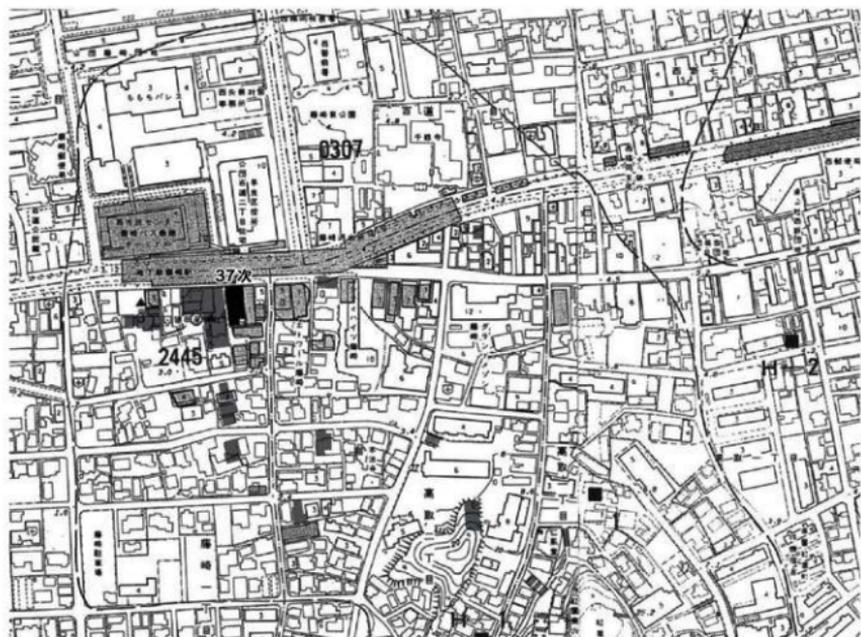
藤崎遺跡は博多湾に面し、西公園から祖原・皿山、西区の愛宕山の間に形成された砂丘上に位置する。砂丘は現在樋井川によって東西に分断されるが、東側は江戸時代に城下町として整備され、近代以降の開発も早かったため、現在では近世も含めて遺構はほとんど確認できない状態である。西側も近代以降開発が進んだが、西新町遺跡、藤崎遺跡では弥生時代以降の遺構が数多く確認されている。

藤崎遺跡は東西 400m、南北 650m の範囲に広がる弥生時代から中世を中心とした遺跡で南東側に位置する皿山以外は砂丘上に位置する。この砂丘には海岸線に沿った東西方向の 2 列の微高地が 300m 離れて並行し、北側の A 微高地には元寇防壁が築かれる。南側の微高地 B では尾根を中心に甕棺墓群と方形周溝墓群が形成される。甕棺墓群は微高地 B の西端に近い現猿田彦神社付近に最も古い弥生時代前期の甕棺墓域が形成され、中期には微高地の尾根に沿って東側に延び、東西 200m、南北 50m の範囲に広がる。方形周溝墓群もほぼ同範囲に広がって現在 16 基程が存在すると推定され、そのうち 3 次調査の 6 号・7 号方形周溝墓と 4 次調査の 10 号方形周溝墓の 3 基から青銅鏡が出土し、その他に 27 次調査地点で大正 6 年に石棺墓から出土した 1 枚と 32 次調査地点から明治 45 年に箱式石棺から出土した 1 枚を加え 5 枚の青銅鏡が出土している。弥生時代後期以降は微高地 B の南側緩斜面に竪穴式住居や掘立柱建物による集落が形成され中世まで続く。13 世紀後半には唐津街道に

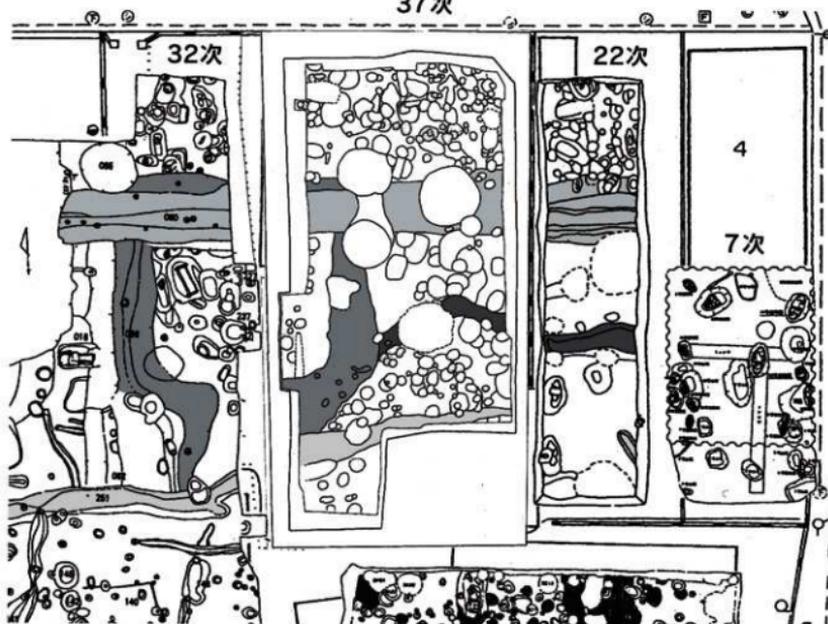


1. 藤崎遺跡
2. 元寇防壕
3. 西新町遺跡
4. 粟倉山瓦葺遺跡
5. 駅前探跡跡
6. 短浜遺跡
7. 小戸古墳群
8. 五島山古墳群
9. 船大町フィッシュ

第1図 周辺遺跡分布図 (1/2500)



第2図 調査地点位置図 (1/4000)



第3図 調査区位置図 (1/300)

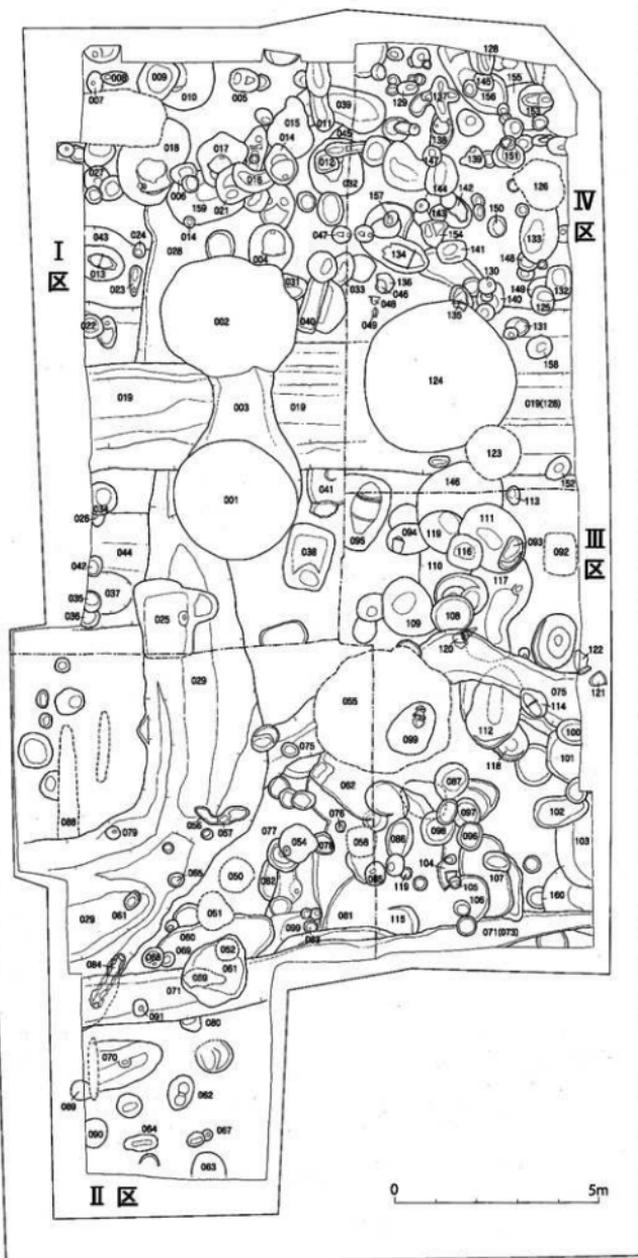
II. 調査の記録

1. 調査の経過

申請地の敷地面積は 502 m²、発掘調査はそのうち建物による破壊を受けない南東隅以外の全面に及ぶ。調査時には崩落防止のために境界から幅 1.2m 程の残地を設定して掘り下げを行った。調査時には現地表から深さ 60 cm の近現代盛土を重機で掘り下げたが、土量が多く置き場が確保できないため、調査区をⅠ～Ⅳ区に4分割して調査を行うこととした。調査は6月11日に機材の搬入、12日にⅠ区の表土剥ぎを行い調査を開始した。7月9日にⅠ区的全景写真の撮影を行ってⅠ区の調査を終え、7月11～12日にⅡ区の表土剥ぎを行い、7月17日からⅡ区の調査を開始した。その後8月3日から17日までⅢ区、8月18日から9月4日までⅣ区の調査を行い、9月5日にⅣ区の埋め戻しを行い調査が終了。9月7日に機材の搬出を行い、その後14日まで整理室で土器洗いをを行った。

2. 調査の概要

調査区の北半で弥生時代前期末から中期前半の甕棺墓が 20 基出土した。甕棺は大型の専用棺が 12 基を数える。そのうち ST018 から小壺が出土した以外に副葬品は出土しなかった。人骨は ST004・018・095・134・135 の 5 基から出土したが全体的に遺存状態は悪く、埋葬姿勢が分かるものは ST004 と 095 の 2 基のみである。土坑は数多く出土したが、甕棺に切られる土坑を数基確認した (SK112・159)。いずれも土器は細片のみの出土で時期は確定できないが、甕棺墓群形成以前に何らかの遺構が存在したことが判明した。土坑は大型で土壇墓の可能性も考えられる。溝は SD075(弥生時代中期)と SD029(方形周溝墓)と SD019(13世紀後半)、SD071(近世～近代)の4条を確認した。



第4图 调查区全体图(1/120)

このうち方形周溝墓のSD029を除く3条は等高線に沿う。SD075は東側22次調査でも出土しており、本調査区で弥生時代中期の甕棺に切られ、弥生時代中期以前まで遡ることが判明した。方形周溝墓のSD029は底面に石棺墓1基を伴う。井戸は4基出土し3基は近代、1基は現代である。地表面から40cm下で調査区全体に広がる整地層を確認した。近代の高取焼きの窯に伴う作業面と考えらる。

3. 遺構と遺物

1) 甕棺

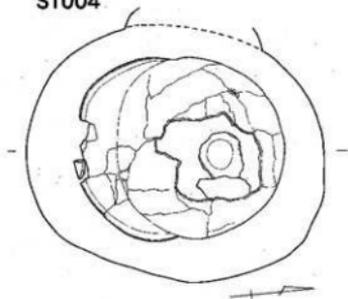
ST004(第5図) 調査区の北側に位置し、SE002に切られる。墓壇掘方は楕円形を呈し、長径123cm、短径101cm、深さ80cmを測る。断面はいびつな逆台形を呈し、底面中央に径14cm、深さ3cmの掘り込みがみられる。棺は主軸をN-5°-Eにとる複棺で埋置角度は51°を測る。上甕は底部が破損し、棺内側に落ち込んでいた。上甕のほぼ全体が遺存するのに対し、下甕は下面側のみで遺存である。上甕に覆われており後世に削平されたとは考えられないため、遺体が乗る部分を残して打ち欠いたと考えられる。最下部より若干上側に穿孔を施す。人骨は頭骨は小片のみで歯は抜け落ちている。椎骨は良好に遺存していたが上側の数個は落ちている。肋骨は左側の数本が遺存していた他、胸骨も遺存していた。上腕骨は左右とも遠位部のみで遺存で桡骨は両端を欠く。大腿骨と脛骨も左右遺存していたが、いずれも両端部は欠損していた。寛骨も遺存状態は悪い。頭位は北を向く。第6図0001は上棺である。大型の甕で口径71cm、器高83cmを測る。色調は淡黄褐色であるが、一部に黒色顔料が残る。調整は外面は底部以外に板による縦ナデを施す。口縁部は横ナデ、内面は板による横ナデである。0002は下棺である。底部は遺存しない。大型の甕で復元口径65.6cm、遺存高75.5cmを測る。色調は黄褐色に赤褐色、暗灰色が斑に入る。胎土は白色砂を多く含む他、赤・黄・黒色の粒を含む。調整は外面が口縁端から胴部までがミガキで、口縁下の横方向の細かなミガキ、その下肩部の縦方向の粗いミガキ、胴部中有の斜め方向のミガキに分かれる。胴部下半は板によるナデで、その下はハケ目を施す。内面は口縁下が横方向のハケ目でその他は板を使用したナデを施す。

ST010(第5図) 調査区北西側に位置する。墓壇掘方の北側が調査区外に延びるが南北に長い楕円形と推定される。現状で南北1.3m、東西139cm、深さ140cmを測る。棺は主軸をN-5°-Eにとる複棺で埋置角度は48°を測る。上棺は土圧のため大きく破損し、端部が下棺胴部に食い込んでおり、下棺も上棺に押されて上面の胴部上半が破損していた。第6図0003は上棺である。大型壺の肩部から上を打ち欠く。色調は淡赤褐色で、黒斑が点在する。調整は外面がミガキで底部直上はハケ目、内面は全体にナデを施す。0004は下棺である。大型の甕で口径64.8cm、器高74.8cmを測る。色調は赤褐色で全体に濃淡の斑がある。頸部と同部中央に3条の沈線を施す。調整は内外面全体にナデを施す。

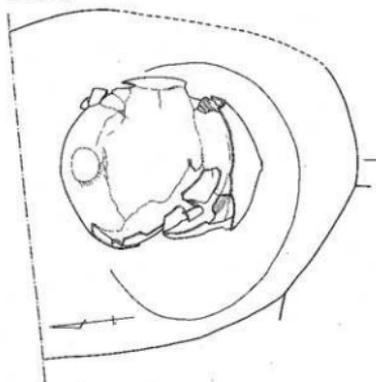
ST013(第7図) 調査区の北西側に位置する。墓壇掘方は東西に長い楕円形で西端が調査区外に延びる。調査区内で東西116cm、南北87cm、深さ35cmを測る。棺は主軸をN-70°-Wにとる複棺で埋置角度は21°を測る。上下棺とも胴部から口縁にかけて削平されている。第10図0011は上棺である。小型甕で口径35.7cm、器高38.3cmを測る。色調は黄褐色で径10cm程の黒斑がある。胎土は白色砂と雲母片を含む。調整は外面が縦ハケ、口縁から内面全面はナデを施す。0012は下棺である。小型甕で口径32.5cm、器高38.1cmを測る。色調は淡褐～淡黄褐色を呈し、胎土は白色砂を多く含む、その他に黒褐色と赤褐色の粒を含む。調整は外面が縦ハケ、口縁が横ナデ、内面は指オサエ後工具を使用したナデを施す。

ST014(第7図) 調査区の北側寄りに位置する。墓壇掘方は南北に長いいびつな楕円形を呈し、長径101cm、短径79cm、深さ88cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面は南側が若干低くなっている。棺は主軸をN-13°-Wにとる複棺で埋置角度は56°を測る。上棺の西側には壺の肩部の破片(0007)を

ST004



ST010



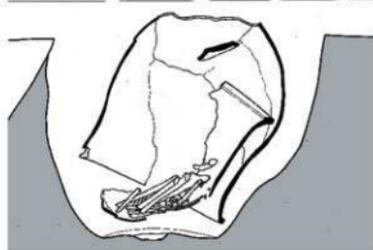
ST014 下棺



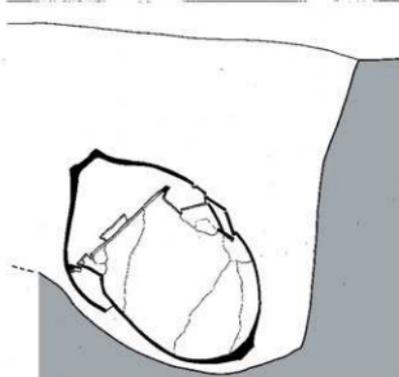
ST010 下棺



H=3.60m



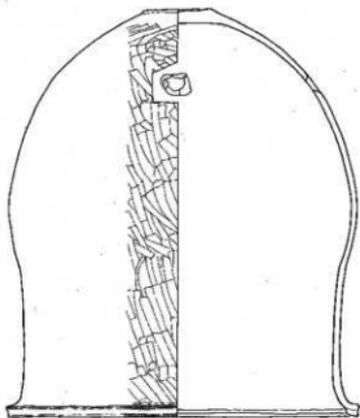
H=3.60m



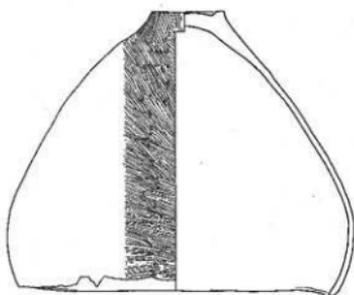
0 50cm

第5圖 ST004・010 遺構実測圖 (1/20)

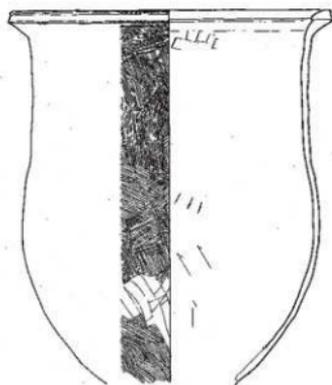
0001(ST004 上)



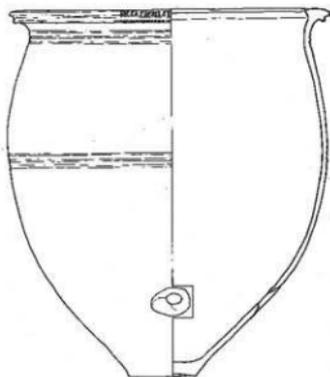
0003(ST010 上)



0002(ST004 下)



0004(ST010 下)

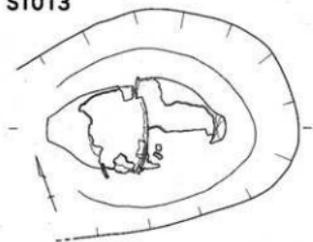


0 50cm

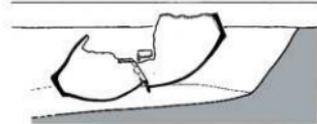
第6図 ST004・010 遺物実測図(1/10)

おいて棺がズレないように固定している。上棺は胴部下半のほぼ同じ高さに13cm離れて2カ所の穿孔あり。下棺は底部から10cm上の接地側に大きな穿孔とその上側に径1.5cmの小さな穿孔がある。また底部から30cm上の上面側にも穿孔があり、打ち欠いた口縁を孔の上に置き、砂が入らないようにしている。出土物(第8図0005~0008)。0005は上棺である。大型の広口壺の肩部から上を打ち欠く。遺存高48.7cm、最大胴径69.3cmを測る。色調は赤橙褐色で濃淡の斑があり、胎土は白色砂を多く含む。調整は外面はミガキで底部直上はハケ目を施す。内面は全面にナデを施す。0006は下棺である。大型の甕で口縁部を打ち欠く。最大胴径49.1cm、遺存高57.5cmを測る。色調は淡褐色を基調とし濃淡で斑状を呈す。頸部と胴部に3条の沈線を施すが、胴部の沈線は1本の沈線を螺旋状にして3条にみせている。調整は内外面とも丁寧なナデで胴部沈線の上に穿孔を施す。0007は0005の肩部である。

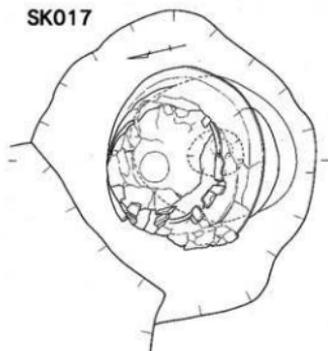
ST013



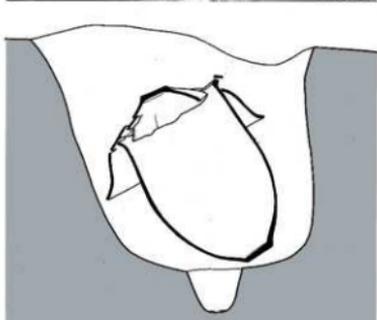
H=3.40m



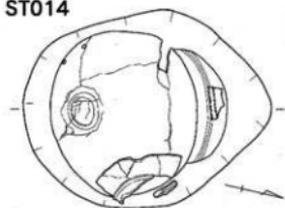
SK017



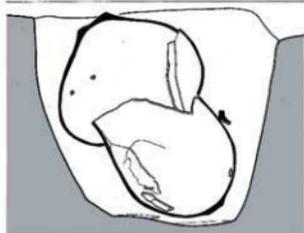
H=3.70m



ST014



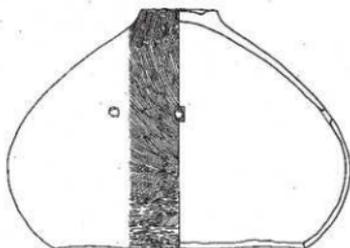
H=3.40m



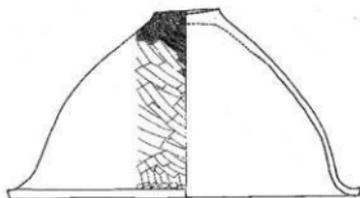
0 50cm

第7图 ST013·014·017 遺構実測図 (1/20)

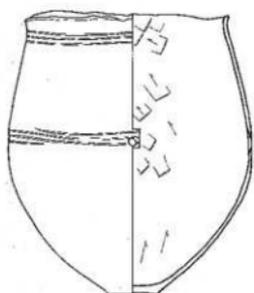
0005(ST014 上)



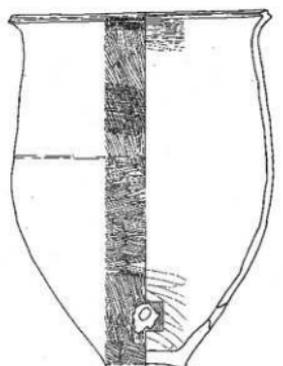
0009(ST017 上)



0006(ST014 下)



0010(ST017 下)

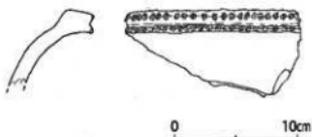


0007



0 50cm

0008



0 10cm

第 8 図 ST014-017 遺物実測図 (1/10-0008 は 1/4)

0005 から打ち欠いて上棺がズレないように墓壇掘方との隙間に挟んでいた。頸部下端に突帯がつく。0008 は 0006 の口縁である。0006 から打ち欠き、0006 の胴部上面の穿孔の上に置いて砂の侵入を防いでいた。

ST017(第7図) 調査区の北西隅に位置する。墓壇掘方はいびつなU形を呈し、南東側を 016 に切られる。東西 126 cm、南北 115 cm、深さ 101 cm を測る。底面中央に径 23 cm、深さ 18 cm の柱穴状掘り込みがある。棺は主軸を N-13°-E にとる複棺で埋置角度は 57° を測る。上棺は土圧で破損し下棺の中に一部が落ち込む。人骨は底面から 5 cm 程浮いた状態で四肢骨片と思われる骨の小片が 3 点出土した。第 8 図 0009 は上棺である。大型の鉢で口径 71.1 cm、器高 38.7 cm を測る。色調は淡黄褐色を呈す。胎土に白色砂を多く含む他、赤褐色粒、黒色粒を含む。調整は外面が斜め方向のナデと底部直上はハケ目を施し、内面は全面ナデを施す。0010 は下棺である。大型甕で口径 48~53 cm、器高 72.8 cm を測る。色調は赤橙褐色を呈し、胎土は 2~3 mm の白色砂を多く含む。胴部中央に大きな黒斑がある。胴部中央に沈線を 1 条巡らす。外面の調整はミガキで、口縁下から底部直上まで方向を変えている。内面は口縁下が横方向のミガキの他はナデを施す。底部から 11 cm 上に内面からの穿孔を施す。

ST018(第9図) 調査区北西隅に位置する。墓壇掘方はいびつな隅丸長方形を呈し、北西隅を攪乱に切られる。長径 212 cm、短径 160 cm を測る。底面は検出面から約 50 cm の深さにテラス状の平坦面が広がり、南端部に径 90 cm、深さ深さ 40 cm 程掘り下げて下棺を据えている。下棺の下には径 22 cm、深さ 35 cm の柱穴状の掘り込みがある。柱穴状掘り込みの埋土は茶褐色砂で遺物は出土していない。テラス中央部分にも柱穴状の掘り込みが見られるが、これは後世の遺構である。棺は主軸を N-17°-W にとる複棺で埋置角度は 49° を測る。上棺西側に接して壺が出土した。第 10 図 0013 は上棺である。大型の甕で底部は削平されている。口径 69 cm、遺存高 61.2 cm を測る。色調は黄褐色で、胎土中に 2~3 mm の白色砂を多く含む。調整は口縁部が横ナデで、外面は方向を変えながらミガキを施す。内面は上半が横方向のミガキ、下半はナデを施す。0014 は下棺である。中型の甕で口径 54 cm、器高 60.5 cm を測る。色調は褐色で全体が濃淡の斑である。胴部中央に径 20 cm の黒斑がある。調整は口縁部が横ナデで、外面は縦ハケ、内面は口縁下の一部が強いナデで、その他は板状工具による斜め方向のナデを施す。胴部下半に穿孔があり、埋置した時に穿孔部分がかもとも低くなり、掘方底面の柱穴状掘り込みの上に来るようにしている。0015 は副葬小壺である。口径 10.2 cm、器高 17.8 cm を測る。色調は本来明褐色だが黒く塗られた痕跡がのこり暗褐色を呈している。胴部最大径の少し下に黒斑がある。調整は外面頸部が縦方向のミガキでそれ以外は横方向のミガキを施す。胴部下位に穿孔を施す。

ST032(第11図) 調査区北側に位置する。埋土が地山の黄白色砂とほぼ同じで墓壇掘方は不明である。棺は主軸を N-5°-W にとる大型棺の複棺で埋置角度は 45° 前後である。下棺は焼成不良で軟質なため出土時には土圧で胴部下半が大きく破損していた。人骨は残っていない。第 12 図の 0018 は上棺である。大型の広口壺で肩部から上を打ち欠く。最大胴径 67 cm、残存高 40.5 cm を測る。色調は淡赤褐色~明赤褐色を呈し、外面は黒色顔料を塗布していたと思われる。胎土は 2~3 mm の白色砂を多く含む。調整は内外面とも板状工具による斜め方向のナデを施す。0019 は下棺である。大型の甕で口縁を打ち欠く。底部は遺存しない。打ち欠いたのか、軟質で細片化したのかは不明である。頸部径 55.4 cm、遺存高 65.6 cm を測る。頸部と胴部に 3 条の沈線を巡らし、その間を 4 条の沈線を単位として 8ヶ所に施す。沈線は胴部、縦線、頸部の順に描いている。色調は淡赤~赤褐色を呈し、胎土に 5 mm 以下の白色砂を多く含む。調整は外面が摩滅のため不明瞭だがミガキと思われる。内面はナデを施す。

ST048(第9図) 調査区の北側に位置する。墓壇掘方は不明である。横倒しにした小型甕の下半のみが出土しており、甕棺墓と思われる。棺は主軸を N-12°-E にとる単棺で埋置角度は 17° 前後である。

第10図0016は復元口径21.8cm、遺存高18cmを測る。色調は淡黄褐色で胎土に細かな白色砂を多く含む。調整は外面が縦方向のナデで、粘土帯接合部に一部指オサエの痕跡が残る。内面は指オサエの後軽く斜め方向のナデを施す。

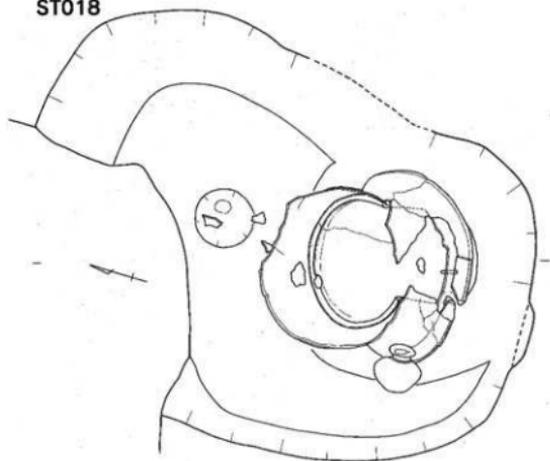
ST049(第9図) ST048の南隣に位置する。墓壇掘方は不明である。半截した小型甕を俯せ、破片の一部を上重ね置いている。遺体の上に甕を被せたものと思われる。棺は主軸をN-26°-Eにとる単棺である。第10図の0017は復元口径21.4cm、遺存高17.3cmを測る。色調は黄褐色を呈し、胎土には白色砂を多く含む、赤褐色粒と黒色粒も含む。調整は外面がハケ、内面がナデ、口縁が横ナデである。

ST094(第11図) 調査区中央に位置する。上棺は底部に削平を受けている。墓壇掘方は南北に長い楕円形で長径126cm、短径71cm、深さ58cmを測る。断面は南側にテラスをつけ埋置角度を調整している。棺は主軸をN-18°-Eにとる大型棺の複棺で埋置角度は42°を測る。上下棺とも胴部下半に穿孔が見られる。人骨は遺存していない。第12図0020は上棺である。大型の甕で口縁を打欠く。頸部径36cm、遺存高52.7cmを測る。頸部に3条の沈線を巡らす。色調は淡褐色～黄褐色を呈し、胴部下半の2ヶ所に黒斑がある。調整は外面は縦ハケ後粗いミガキ、内面は頸部が連続した指オサエで胴部はナデを施す。0021は中型の甕で口縁に貝殻による刻目を施し、頸部に3条の沈線を巡らす。底部は上底である。口径32.5cm、器高39.2cmを測り、色調は赤褐色で胎土に2mm程の白色砂を多く含む。沈線下の対角線上の2点に10～15cm程の黒斑がある。調整は外面が沈線から上は横方向の細かなミガキ、下はハケ後縦及び斜めのミガキを施す。内面は沈線より下が指オサエ後板によるナデ、上は長めの指オサエ後に板状工具による軽い横ナデを施す。外底部は外周に沿ってナデを施す。

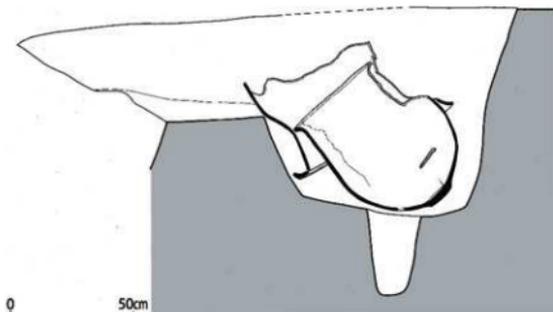
ST095(第11図) 調査区中央に位置する。墓壇掘方は南北に長い楕円形を呈すると思われるが、西縁部は不明瞭である。長径191cm、深さ72cmを測る。断面は逆台形を呈す。棺は主軸をN-27°-Eにとる大型棺の複棺で埋置角度は15°を測る。人骨は頭骨と下顎骨が若干ズレた状態で出土した他、左右の大腿骨、脛骨、あと上肢の一部が遺存する。いずれも遺存状態は悪く、頭蓋骨は右側頭頂骨が大きく欠損し、左右の大腿骨と脛骨も両端部が欠損している。椎骨や肋骨は遺存していなかった。第12図の0022は上棺である。大型の鉢で口径57.4cm、器高44.6cmを測る。色調は淡褐色で部分的に赤・黄色を帯びて斑状である。胎土は白色砂を多く含む他、赤褐色粒と黒色粒を含む。調整は外面は全体がナデで底部頂上のみハケ目が残る。内面はナデで指オサエの痕が残る。0023は下棺で大型の甕である。口縁下に1条、胴部に2条の突帯を巡らす。口径60.6cm、器高92.7cmを測る。色調は淡黄褐色で口縁突帯下に30cm、反対側に60cmの黒斑がある。胎土には白色砂を多く含む他黒・黄・褐色粒を含む。調整は外面が胴部突帯の5cm下から口縁までが横ナデ、下が縦ナデで、底部上にハケ目が残る。内面はナデで口縁下に指オサエの痕跡が残る。

ST099(第13図) 調査区中央からやや南東側に位置する。近代の擾乱SK055に囲まれている。SK055を掘り下げた際にST099に気づき、それ以上壊さず残したと思われる。墓壇掘方は擾乱底面に痕跡状に残り平面は楕円形で長径で1m弱と推定される。棺は主軸をN-13°-Eにとる小型甕の複棺で埋置角度は18°を測る。第13図0024は上棺である。広口壺で口径33.0cm、遺存高31.8cmを測る。外面は内外面とも丹塗りである。外面は頸部から口縁は幅4.5cm程の縦方向のミガキを暗文状に6ヶ所施し、胴部上半は横方向のミガキ、胴部下半は縦方向のミガキを施す。内面は頸部から上は横方向のミガキ、胴部はヘラナデを施す。胎土は濃灰色～橙褐色を呈し、白色砂を多量に含む。0025は下棺である。広口壺で口径36.8cm、器高33.4cmを測る。底面を除く外面全面と内面は頸部から上が丹塗りである。胴部最大径部にM字形の突帯が1条付く。外面は頸部から上に縦方向に暗文状のミガキを施し、胴部上半は横方向の細かなミガキ、胴部下半は縦方向のミガキを施す。内面は頸部から上に横方向の細かなミガキ、胴部はナデを施す。胎土に白色細砂を含む。

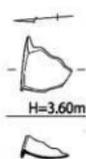
ST018



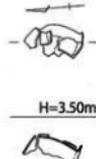
H=3.60m



ST048

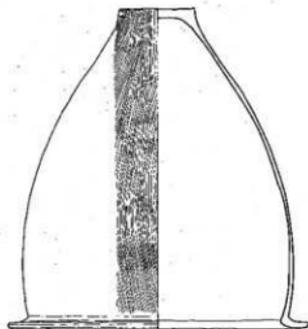


ST049

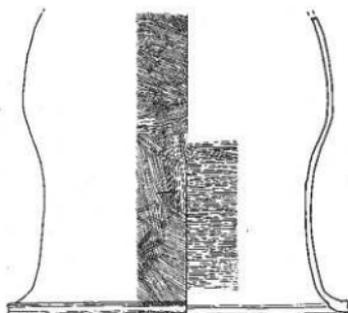


第9图 ST018·048·049 遺構実測図 (1/20) 0 50cm

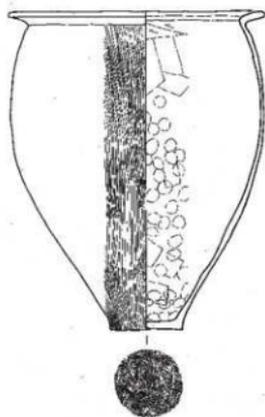
0011(ST013上)



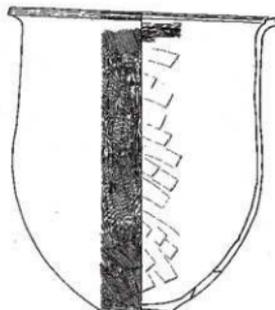
0013(ST018上)



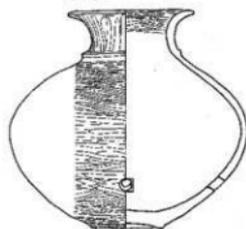
0012(ST013下)



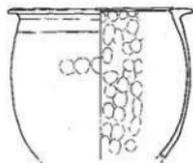
0014(ST018下)



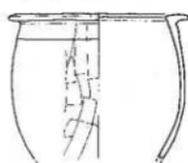
0015



0016(ST048)

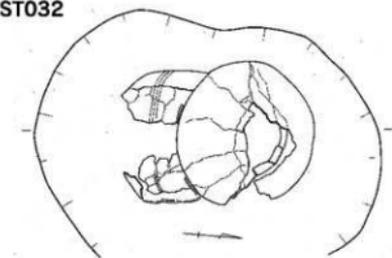


0017(ST049)

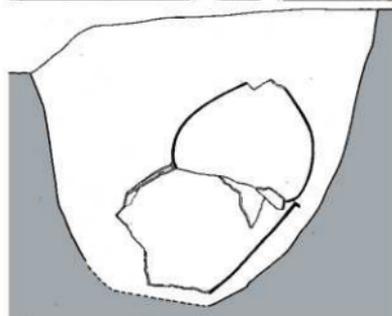


第10図 ST013-018-048-049 遺物実測図 (ST018は1/10・0015は1/4・その他1/6)

ST032

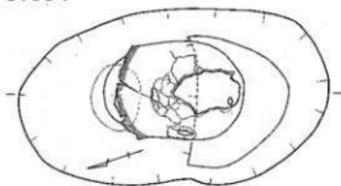


H=3.40m

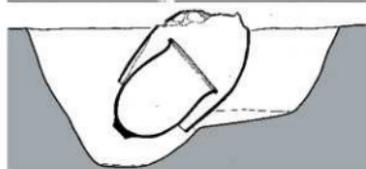


0 50cm

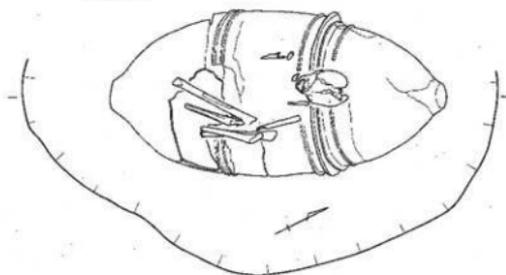
ST094



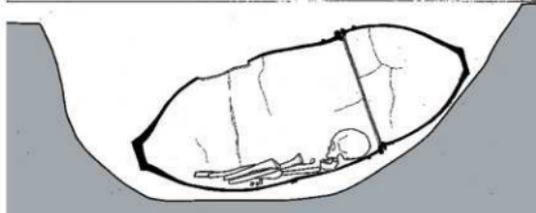
H=3.40m



ST095

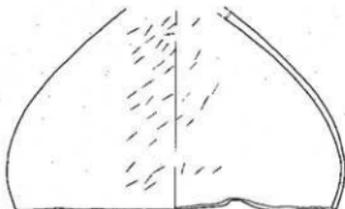


H=3.40m

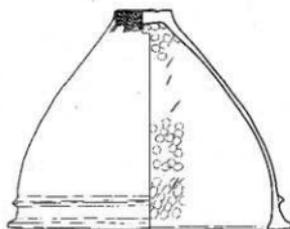


第 11 图 ST032・094・095 遺構実測図 (1/20)

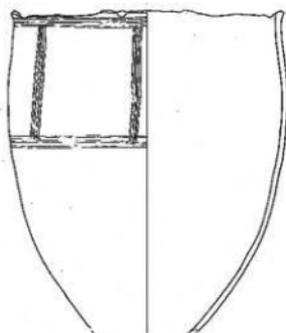
0018(ST032 上)



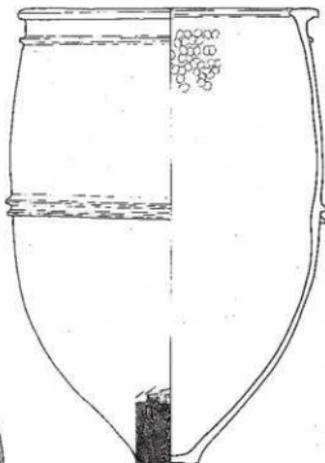
0022(ST095 上)



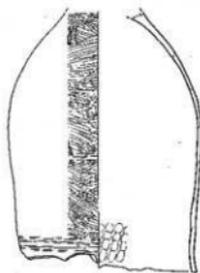
0019(ST032 下)



0023(ST095 下)



0020(ST094 上)



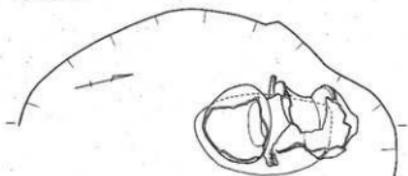
0021(ST094 下)



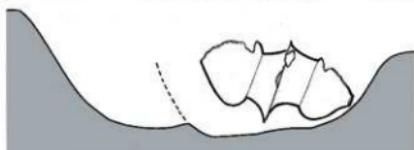
0 50cm

第 12 图 ST032・094・095 遺物実測図 (1/10)

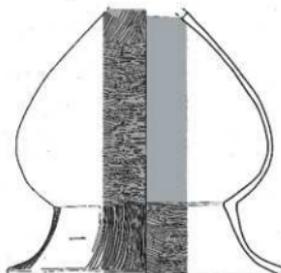
ST099



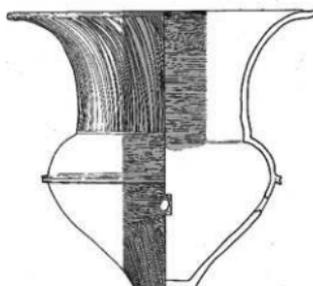
H=3.30m



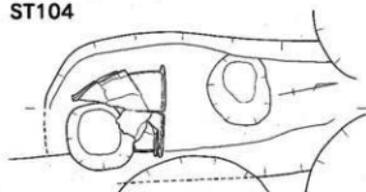
0024(ST099 上)



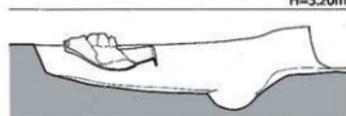
0025(ST099 下)



ST104

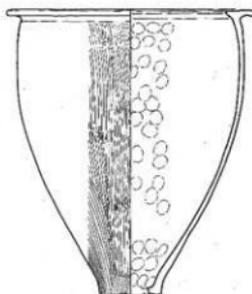


H=3.20m



0 50cm

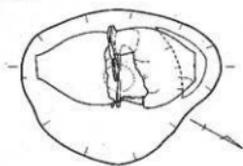
0026(ST104)



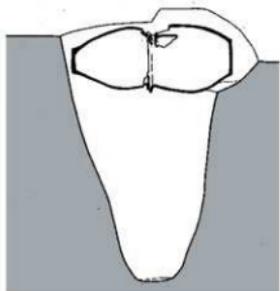
0 20cm

第 13 図 ST099・104 遺構・遺物実測図 (1/20・1/6)

ST114

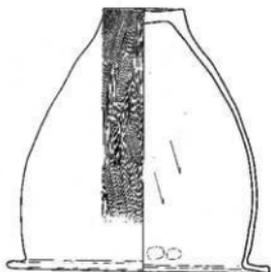


H=3.30m

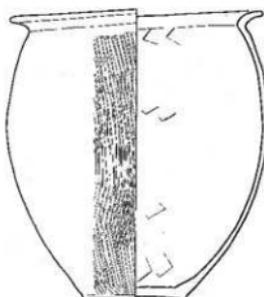


0 50cm

0027(ST114 上)



0028(ST114 下)



0 20cm

第 14 図 ST114 遺構・遺物実測図 (1/20・1/6)

突帯下に穿孔を施し、この穿孔は出土時点で上側頂部に近い位置に穿っている。

ST104 (第 13 図) 調査区の南側に位置し、上半部は削平を受けている。墓壇掘方は南北に長い溝状を呈するが、北端は SK096・098 に切られ、本来の長さは不明である。現状で南北 1.2m、幅 60 cm、深さ 28 cm を測る。棺は主軸を N-12° -E にとる小型甕の単棺で埋置角度は 10° 前後である。第 13 図 0026 は小型の甕で口径 29.6 cm、器高 34.2 cm を測る。色調は淡黄褐色～淡灰褐色を呈し、胎土に 5 mm 以下の白色砂を多く含む。調整は外面は縦ハケ、口縁は横ナデ、内面は指オサエ後ナデを施す。

ST114 (第 14 図) 調査区の東側に位置し SD075 を切る。墓壇掘方は南北に長い楕円形を呈し、東側がやや膨らみを持つ。長径 81 cm、短径 67 cm を測る。底面北側にテラス状の平坦面を設け、南側はを柱穴状に掘り込む。テラスからの深さは 76 cm を測る。棺は主軸を N-29° -W にとる小型甕の複棺で埋置角度はほぼ水平である。人骨、副葬品は出土していない。第 14 図の 0027 は上棺である。小型甕で土圧のため口縁が楕円形を呈す、口径 28～31.5 cm、器高 31.7 cm を測る。色調は橙褐色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む他 6 mm 程の小礫も含む。調整は外面は縦ハケ。口縁は横ナデで外面縦ハケの上端をナデ消す。内面は縦方向のナデで、口縁下に指オサエの痕跡が残る。0028 は下棺である。小型甕で口径 30 cm、器高 34.7 cm を測る。橙褐色を呈し、外底部に黒斑がある。胎土中に白色砂、赤褐色粒、黒色粒を多く含む。調整は外面が粗い縦ハケ、口縁が横ナデ、内面は指オサエ後板による斜め方向のナデを施す。

ST120



ST120 下面

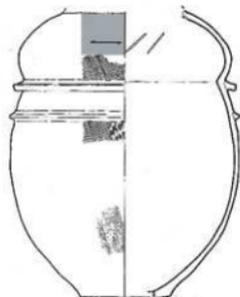


H=3.40m

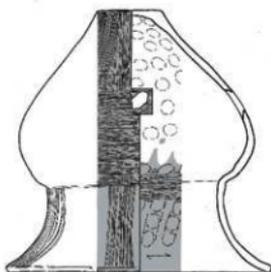


0 50cm

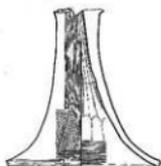
0029(ST120)



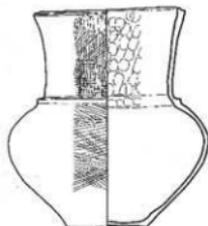
0031(ST120上)



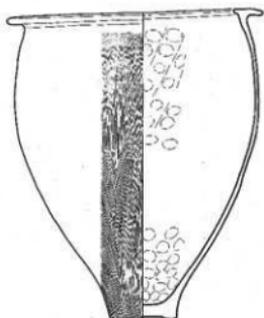
0030(ST120)



0032(ST120下)

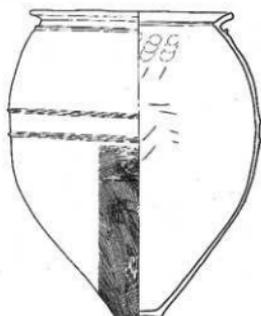


0033(ST121)



0 20cm

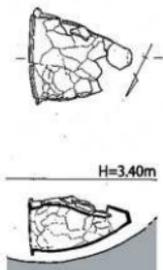
0034(ST122)



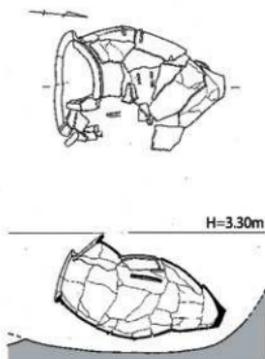
0 50cm

第15図 ST120 遺構・遺物、ST121・122 遺物実測図 (1/20・1/6・0034 は 1/10)

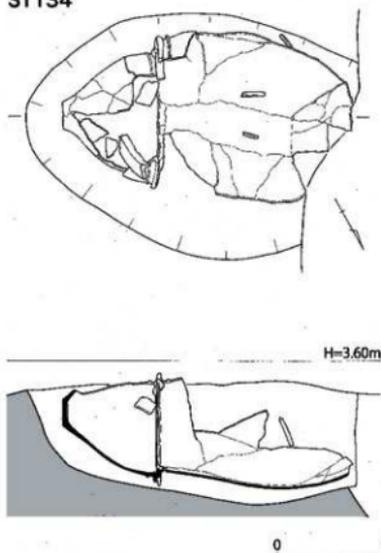
ST121



ST122

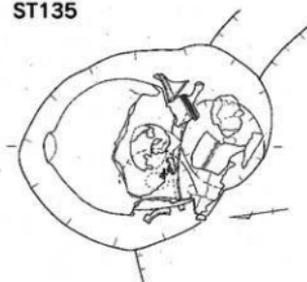


ST134

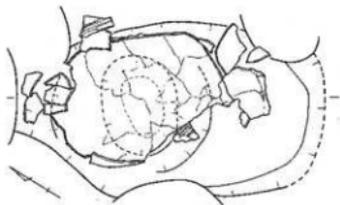


第 16 图 ST121·122·134 遗构实测图 (1/20)

ST135

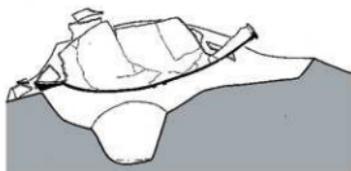


ST142



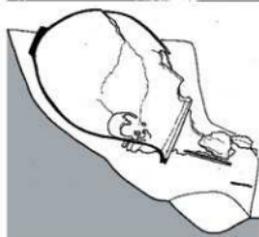
H=3.60m

ST135 下棺



0 50cm

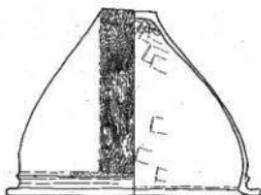
H=3.40m



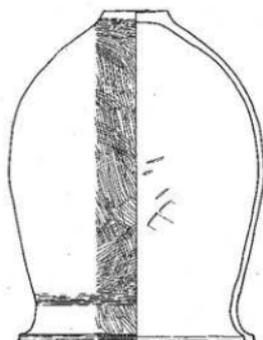
第 17 図 ST135-142 遺構実測図 (1/20)

ST120(第 15 図) 調査区の中央やや東側に位置し、SD075 を切る。覆口の小型壺棺である。掘方は SD075 の埋土と区別がつかず不明である。0032 の直口壺に 0031 の広口壺を蓋として被せ、転がらないように 0030 の高坏脚で支え、その上から半裁した 0029 の甗型土器をかぶせている。0032 が蓋にも見えるが、0029 の甗型土器が 0032 を覆っているため、0032 を棺とした。埋土、壺棺中から人骨、副葬品などは出土していない。出土遺物(第 15 図 0029~0032)。0029 は甗型土器である。復元底径 11 cm、遺存高 34.3 cm を測る。色調は黄褐色を呈し、口縁部が丹塗りだったと思われる肩部に赤色顔料が垂れている。胎土は微粒~5 mm 程の白色砂を多く含む。外面は肩部が横方向のミガキ、胴部は縦ハケで突帯間と胴部下半はナデのためハケ目が消えている。内面は全面的に板によるナデを施す。底部から胴部下半に黒斑がある。0030 は高坏脚である。底径 18.5 cm を測る。外面は丹塗り、内面は淡黄褐色を呈す。胎土に細砂を少量含む。調整は外面が縦方向のミガキ、端部が横ナデ、

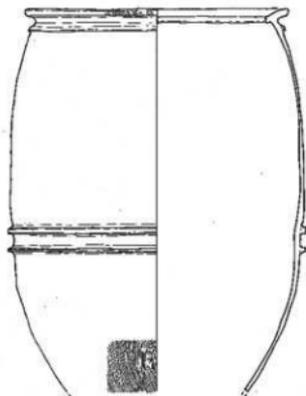
0035(ST134 上)



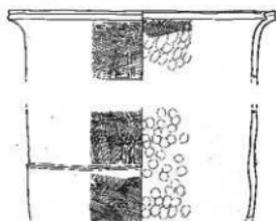
0037(ST135 上)



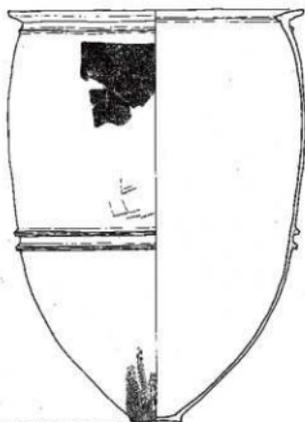
0036(ST134 上)



0038(ST135 下)



0039(ST142 下)



0 50cm

第 18 图 ST134·135·142 遺物実測図 (1/10)

内面は上夫 2/3 にシボリ痕が残り、下 1/3 はそれをナデ消した後下端は横方向のハケ目を施す。0031 は広口壺である。口径 31.7 cm、器高 31.4 cm を測る。色調は底部を除く外面と内面の肩部から上は丹塗り、内面胴部は淡黄褐色を呈し、垂れた丹が点在する。胎土は精良で砂粒を少量含む。調整は外面が頸部から上は横方向の丁寧なミガキの上に縦方向の 8 本前後のミガキを 1 組の暗文とし、一周で 7 組の暗文を施す。胴部上半は横方向のミガキを胴部周囲を 7 分割して施し、胴部下半は縦方向の粗いミガキを施す。内面は口縁が横方向のミガキ、頸部が横方向の太い幅のミガキ、胴部は指オサエ後ナデを施す。胴部に焼成後外面から穿孔を施す。0032 は直口壺である。口径 18.1 cm、器高 26.3 cm を測る。頸部に断面三角形の突帯が付く。色調は淡橙黄褐色を呈し外面は黒色顔料を塗布していたと思われる。外面胴部は底部を中心とする約 1/2 は表面が剥落している。胎土には白色砂を少量含む。調整は外面の頸部から上は縦方向の粗いミガキ、突帯は横ナデで胴部は横及び斜め方向のミガキを施す。胴部下半から底部は剥落のため不明。口縁内外は横ナデ、内面はほぼ全面に指オサエ後軽いナデを施す。

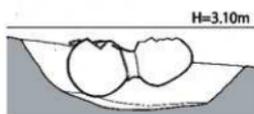
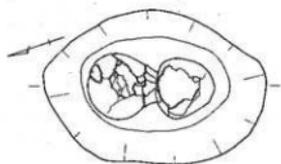
ST121(第 16 図) 調査区の東辺中央部に位置し SD075 を切る。墓塚掘方は不明である。棺は主軸を N-65° -E にとる小型棺の単棺で埋置角度はほぼ水平である。土圧で上側が割れて落ち込んでいる。人骨は遺存していない。出土遺物(第 15 図 0033)。0033 は小型棺で変形を呈す。口径 30.5 cm、器高 37.2 cm を測る。色調は黄褐色で一部で少し赤味を帯びる。胎土は 5 mm 以下の白色砂を多く含む。調整は口縁部は横ナデ、外面は縦ハケで口縁付近は横ナデでナデ消されている。内面は指オサエ後ナデを施す。

ST122(第 16 図) ST121 の北西側 30 cm に位置する。墓塚掘方は不明である。棺は主軸を N-5° W にとる小型棺の単棺で埋置角度は 25° を測る。人骨は遺存していない。出土遺物(第 15 図 0034)。0034 は中型の甕である。口径 41 cm、器高 62.5 cm を測る。頸部に 1 条、胴部に 2 条の突帯が巡る。色調は淡黄褐色を呈し、口縁突帯下に 40×30 cm の黒斑、反対側胴部突帯に径 20 cm の黒斑がある。胎土は白色砂の他に赤・黒褐色粒を含む。調整は外面はハケ後に状藩部にナデを施しハケ目を消す。内面は全面ナデを施し、口縁下に指オサエの痕跡が残る。

ST134(第 16 図) 調査区の北側に位置する。墓塚掘方は東西に長い楕円形を呈し、西側を土坑に切られる。現状で長径 132 cm、短径 99 cm、深さ 49 cm を測る。棺は主軸を N-61° -W にとる大型棺の複棺で埋置角度はほぼ水平である。削平のため上側 1/3 程と下棺底部が欠損する。出土遺物(第 18 図 0035・0036)。0035 は上棺で大型の鉢である。口径 51.4 cm、器高 38.2 cm を測る。口縁下に 1 条の突帯を巡らす。色調は淡黄褐色を呈し、突帯下から底部まで及ぶ黒斑が対称の位置に 2 か所みられる。調整は口縁は横ナデで、外面は縦ハケ、内面は板状工具によるナデを施す。0036 は下棺で大型の甕である。口径 53.4 cm、遺存高 71.8 cm を測る。口縁下に 1 条、胴部に 2 条の突帯を巡らす。色調は淡褐色で部分的に黄・赤が強く斑状をなす。胎土は径 1 mm の白色砂を多く含む。調整は口縁部と胴部突帯部分が横ナデ、胴部上半が縦方向のナデで下半に縦ハケが残る。内面は縦方向のナデを施す。

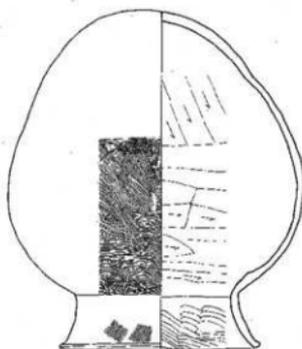
ST135(第 17 図) 調査区の北東側に位置する。南端を SE124 に切られ、上棺の口縁の一部と下棺の大部分を削平された他、下棺は焼成があまく軟質なため、出土時には細片化が進んでいた。墓塚掘方は現状で長径 103 cm、短径 81 cm、深さ 78 cm を測る。底面に径 30 cm 以上、深さ 16 cm の逆台形の掘り込みがある。棺は主軸を N-8° -E にとる大型棺の複棺で埋置角度は 25° 前後である。人骨は SE124 に削られた時点でかなり破損したと思われ、頭骨と下顎骨のみが遺存状態が悪い状態で出土した。頭骨は上顎骨が欠損しており、歯のみが若干原位置を保って出土した。頭骨は北を上にして若干西を向いているが、これが埋葬時の姿勢のままかは不明である。出土遺物(第 18 図 0037・0038)。0037 は上棺で大型の甕である。頸部に 4 本の沈線を巡らす。復元口径 47.4 cm、器高 67.4 cm を測る。

SK062

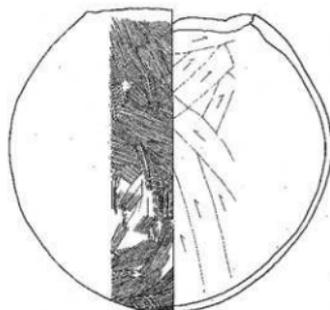


0 50cm

0040(SK062 上)



0041(SK062 下)



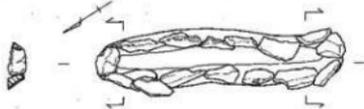
0 10cm

SK084



H=2.30m

H=2.30m



H=2.30m

H=2.30m

1m

0

第 19 図 SK062・SK084 遺構・遺物実測図 (1/20・1/30・1/4)

色調は淡褐色で胎土に 2~3mm の白色砂を多く含む。調整は外面がミガキ、内面は板状工具による丁寧なナデを施す。0038 は下棺である。大型の甕で復元口径は約 54 cm を測る。胴部に突帯を 1 条巡らす。色調は淡褐色~黒色を呈し、胎土に 3mm 以下の白色砂を多く含む。調整は口縁部が横ナデで、外面頸部が横方向のミガキ、突帯から上が縦ハケ、下が横ハケを施す。内面は全体にナデを施し、指オサエの痕跡が残る。**ST142(第 17 図)** 調査区の北東側に位置する。墓壇幅方は南北に長い楕円形で両端を切られ、遺存状態は不良である。現状で長径 124 cm、短径 69 cm、深さ 38 cm を測る。底面中央に長径 39 cm、深さ 25 cm の柱穴状の掘込みを持つ。棺は主軸を N-31° -W にとり埋置角度は 20° 前後である。出土遺物(第 18 図 0039)。0039 は大型の甕で復元口径 59.6 cm、器高 83.7 cm を測る。口縁下に 1 条、胴部に 2 条の突帯を巡らす。色調は赤褐色で胎土に白色砂を多く含む他、赤褐色・黄・黒色粒を含む。調整は口縁と突帯部が横ナデ。その他はナデで底部付近に縦ハケが残る。内面は全面にナデを施す。

2) 壺棺墓

SK062(第 19 図) 調査区の南端に位置する。掘方平面は不整楕円形を呈し、長径 90 cm、短径 62 cm、深さ 29 cm を測る。主軸は N-19° -E で断面は逆台形を呈す。棺は覆口の壺棺で南側の蓋は完形のまま、北側の棺は頸部から上を打ち欠く。人骨、副葬品は出土しなかった。古墳時代初頭で方形周溝墓と同時期と考えられる。0040 は上棺である。口径 16.2 cm、器高 27.6 cm を測る。色調は淡黄褐色で底部脇に径 8 cm の黒斑がある。外面は煤が付着する。胎土には径 4~5 mm の白色砂を多く含む。調整は口縁が横ナデで頸部はハケ後横ナデ、胴部上半は細かなハケ、胴部下半はナデを施す。内面は頸部が粗い横ハケ、上半は横方向のヘラケズリ、胴部下半は縦方向のヘラケズリである。0041 は下棺で口縁を打ち欠く。頸部径 13.6 cm、遺存高 24.8 cm を測る。色調は淡黄褐色を呈し、外面には煤が付着する。胎土は 5mm 以下の白色砂を多く含む。調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリである。

3) 石棺墓

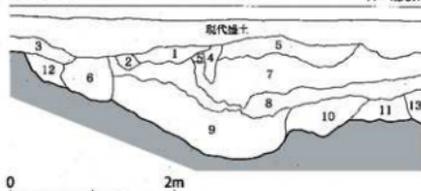
SK084(第 19 図) 調査区の南西側に位置する。古墳時代前期の前方後型を呈する周溝墓の溝(SD029)底面から出土した。石棺墓は東側くびれ部に位置するが、西側くびれ部でも小口に板石を使用した土壇墓(SR236)が出土している(第 32 次調査 福岡市埋蔵文化財調査報告第 824 集「藤崎遺跡 15」2004 年)。石棺墓は長さ 152 cm、最大幅 38 cm を測り、主軸を N-32° -E にとる。石棺の幅は最小で 15 cm とかなり狭い。掘方の深さは 20 cm 程で北東側には小口状の礫を置いている。棺は長さ 20~30 cm 程の板状の石を東側に 7 枚、西側に 8 枚使用する。石は頁岩が多いが安山岩や花崗岩の円礫を打欠いた物も含まれる。板石は南北両端を除いて掘方底面から浮いた状態である。覆土は暗褐色を呈す。遺物は出土していない。

4) 方形周溝墓

SD029(第 20 図) 西側の第 32 次調査で出土した 2 号周溝墓の続きである。幅 3m 前後、深さ 80 cm を測り、断面は U 字形を呈す。32 次では南端が攪乱で削平されるものの、全長は約 20m と推定される。32 次で主体部と思われる土壇墓(SR215)が出土したが、方形部の西に偏っているため本調査区でも埋葬施設の出土が期待されたが出土しなかった。出土遺物(第 20 図 0050・0051)。0050 は台付直口甕である。口縁部と底部のみで胴部は出土していないが同一個体である。口径は 15.2 cm を測り、赤褐色を呈す。頸部に突帯を巡らす。調整は外面がハケ目の上から縦方向のミガキで突帯のみ横ナデ、内面は全体にハケ目を施す。高台は外面が縦方向のミガキ、内面は横ナデである。0051 は周溝内で底面から 60 cm 上で横倒しの状態で出土した。口径 17.4 cm、器高 33.8 cm を測る。外面は黄褐色、内面は橙褐色を呈し胎土に白色砂と雲母片を多く含む。2 点の他に土師器大型壺片、土師壺片等が出土した。

SD019

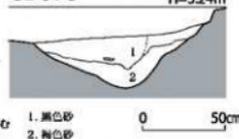
H=4.30m



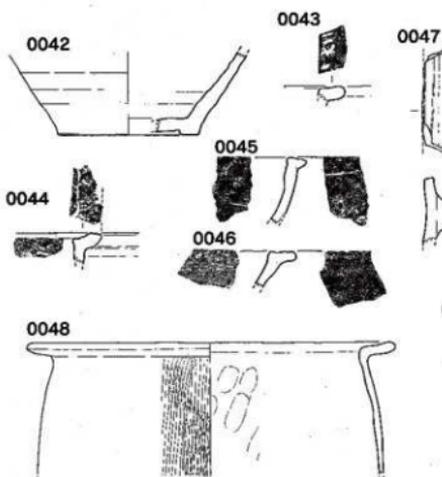
1. 輝岩系褐色土 近代
2. 輝岩系褐色砂質土
3. 茶褐色砂
4. 暗褐色砂
5. 茶褐色砂 近代～近代
6. 茶褐色砂 白色粗砂少量含む
7. 暗褐色砂 炭化物少量含む
8. 暗褐色砂
9. 暗茶褐色砂
10. 暗茶褐色砂 白色粗砂を多く含む
11. 暗褐色砂
12. 暗茶褐色砂
13. 褐色砂 灰土

SD075

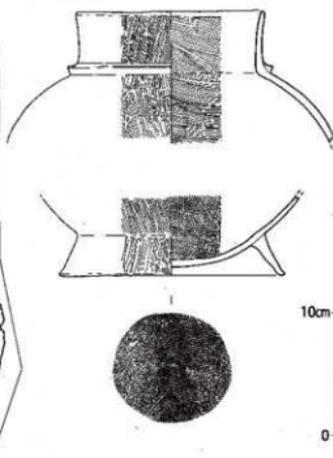
H=3.24m



1. 黒色砂
2. 褐色砂

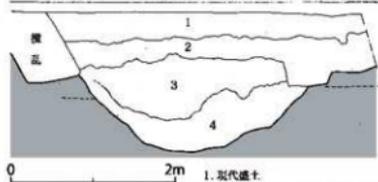


0050



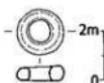
SD029

H=4.30m



1. 近代遺土
2. 茶褐色砂質土 炭化物・灰土ブロックを多く含む
灰土ブロックは層理状である
近代遺土
3. 暗褐色砂質土 白色粗砂を多く含む
4. 褐色砂

0052



第20図 溝 遺構・遺物実測図 (1/60・1/30・1/4・0052は1/2)

5) 溝

SD019(第20図) 調査区の北側に位置する東西方向の溝である。幅3.1m、深さ73cmを測る。埋土は暗茶褐色を呈す。周辺の調査により溝は等高線に沿って東西方向に延び、現在は長さ400m程が確認されている。埋土中から龍泉窯系青磁碗Ⅰ類や土錆の他に水注と思われる陶器片など12~13世紀頃の遺物が出土した。周囲の調査では、出土した遺物から13世紀後半と考えられている。出土遺物(第20図0042~0049)。0042は陶器甕底部、0043~0046は土錆口縁、0047は移動式竈、0048は弥生時代甕、0049は不明鉄製品である。厚さ2.5~3mm程の板が4枚重なっている。

SD028(第4図) 調査区の北西側に位置する南北方向の溝状遺構で南側をSD029(13世紀後半)に切られSD019(古墳時代前期)を切る。西端は確認したが東端はSE002など多くの遺構に切られて不明である。幅は1.8m以上、深さは8cmを測り埋土は黒色を呈す。遺物は出土していない。

SD071(第4図) 調査区の南側に位置する東西方向の溝である。攪乱のSK060に切られており、それから西側を071、東側を073としたが、同一遺構と判明したので071に統一する。調査区西側でSD029を切る。最大幅126cm、深さ44cmを測る。埋土は暗褐色を呈す。埋土中から近世末から近代の陶器摺鉢等が出土した。出土遺物(第20図0052)。0052は石英製と思われる装飾品である。

SD075(第20図) 調査区中央に位置する東西方向の溝でSD029(古墳時代初頭)に切られる。最大幅126cm、深さ22cmを測る。埋土は黒褐色を呈す。遺物は少ないがST114やST120、ST121の複数の甕棺(弥生時代中期中頃)に切られており、弥生時代中期前半頃と考えられる。

6) 土坑

(1) 弥生時代の土坑

SK038(第21図) 調査区中央に位置する。平面は南北に長い長方形を呈し、長径161cm、短径113cm、深さ76cmを測る。主軸はN-5°-Eである。断面は逆台形で南側が15cmほど窪む。埋土は茶褐色砂で、甕棺片等が出土した。弥生時代後期頃か。

SK039(第21図) 調査区北端に位置し、東西に長い溝状を呈す。西端は011と015に切られる。現状で長さ210cm、幅96cm、深さ68cmを測る。埋土から甕棺片が出土した。弥生時代と思われる。

SK101(第21図) 調査区の南東側に位置しSP100に切られる。遺構東端が調査区外に延びており、平面形は不明である。調査区内で南北140cm、東西83cm、深さ26cmを測る。埋土は茶褐色砂で、弥生時代中期前半の土器片が2点出土した。

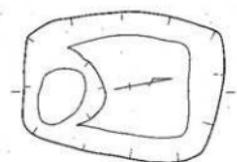
SK109(第21図) 調査区のほぼ中央に位置しSK108(弥生時代中期)に切られる。平面は楕円形を呈し、長径149cm、短径125cm、深さ60cmを測る。主軸はN-15°-Wで断面は逆台形を呈す。埋土は暗黄褐色砂で地山の砂がわずかに汚れたものである。土器片が1点出土した。

SK112(第21図) 調査区の南東側に位置し、SD075とST114に切られる。平面は南北に長い楕円形で長径203cm、短径148cm、深さ111cmを測る。主軸はN-11°-Eで断面は逆台形を呈す。埋土は暗褐色砂である。遺物は少なく弥生時代中期の土器片が4点出土した。弥生時代中期前半と考えられる。

SK117(第21図) 調査区の中央西寄りに位置し、SD075、SK108・111等の弥生時代中期の遺構に切られる。平面は南北に長い不整形円形を呈し、長径273cm、短径154cm、深さ78cmを測る。埋土は淡褐色砂である。埋土中から土師皿と思われる土器小片が出土したが、混入と考えられる。

SK119(第21図) 調査区中央西寄りに位置する。平面は楕円形を呈し長径152cm、短径112cm、深さ118cmを測る。主軸はN-19°-Wで、断面は逆台形を呈す。埋土は淡黄褐色で中期前半の甕棺片が数点出土した。

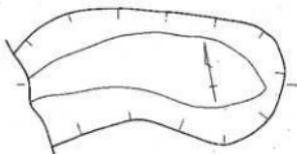
SK038



H=3.30m



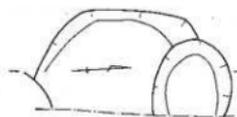
SK039



H=3.40m



SK101



H=3.30m



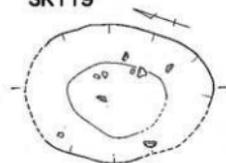
SK109



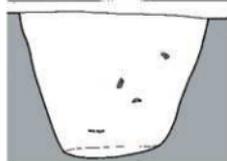
H=3.50m



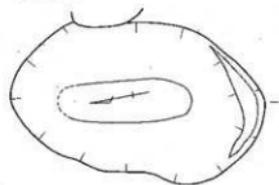
SK119



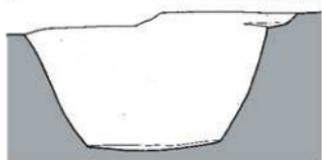
H=3.40m



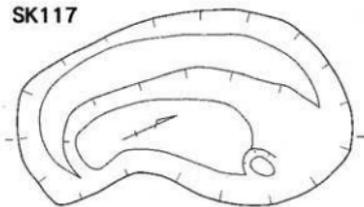
SK112



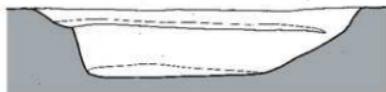
H=3.40m



SK117



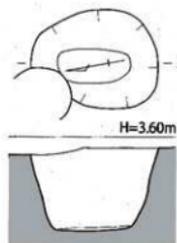
H=3.30m



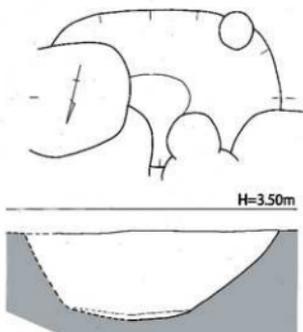
第 21 图 土坑实测图 I(1/40)

0 1m

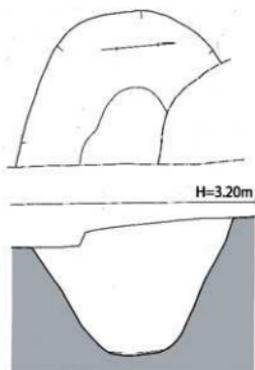
SK144



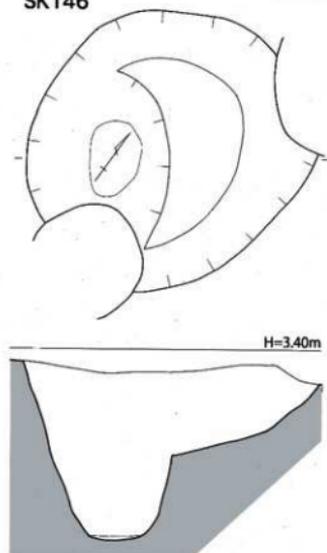
SK159



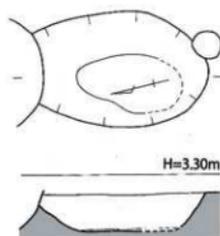
SK160



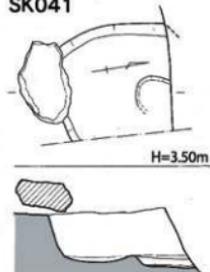
SK146



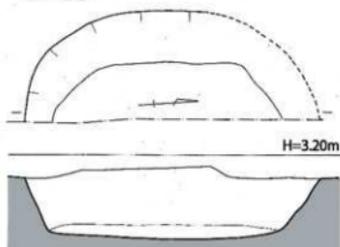
SK133



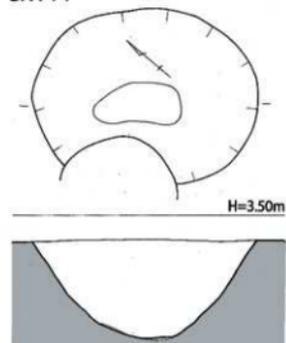
SK041



SK103

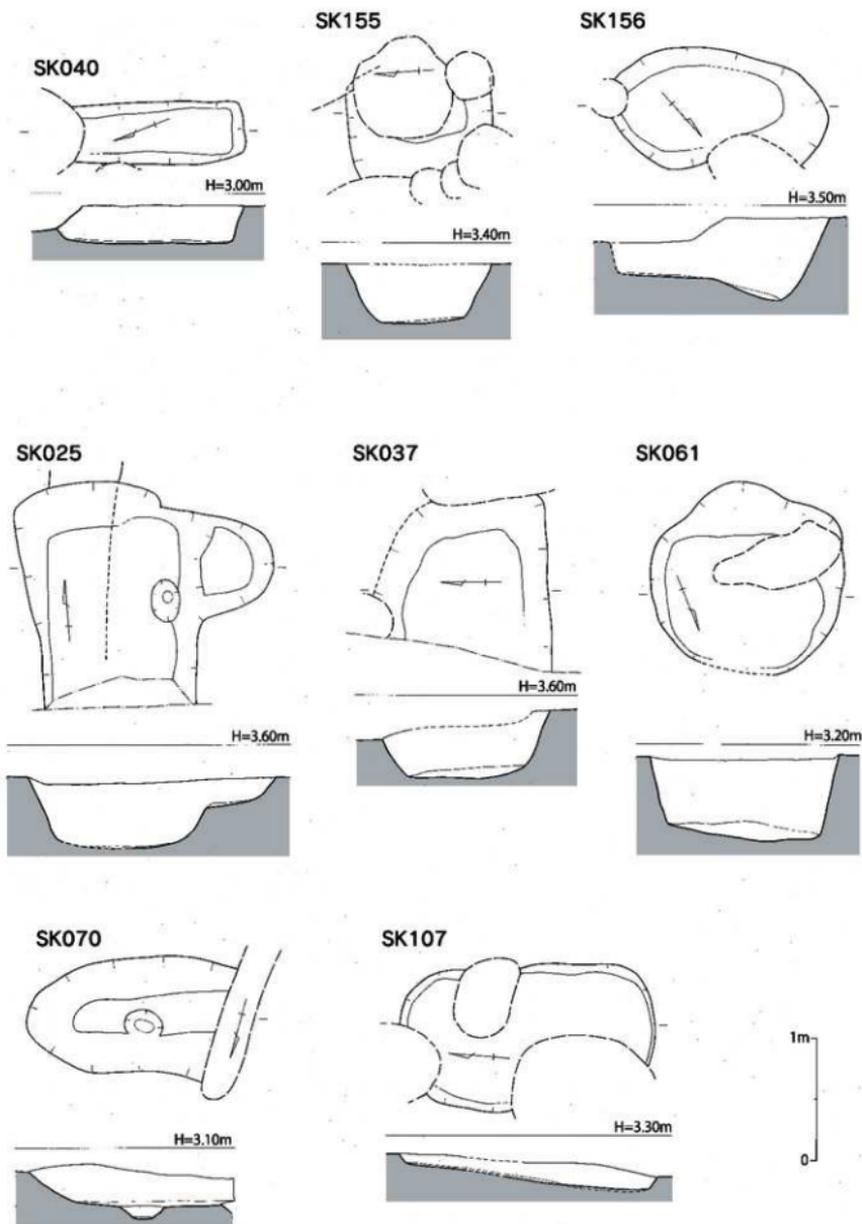


SK111



0 1m

第 22 图 土坑实测图 2(1/40)



第 23 图 土坑实测图 (1/40)

SK144 (第22図) 調査区北東側に位置しSP138(弥生時代)とSP147(時期不明)に切られる。平面は楕円形を呈し、長径102cm、短径73cm、深さ66cmを測る。主軸はN-10°-Eで断面は逆台形を呈す。埋土は赤褐色で甕棺と思われる破片が4点出土した。

SK159 (第22図) SE002の北側に位置し、ST017等に切られる。平面は東西に長い楕円形を呈し、主軸をN-77°-Eにとる。長径は約2m、幅127cm、深さ61cmを測り断面は逆台形を呈す。埋土は淡褐色を呈す。遺物は出土していない。

SK160 (第22図) 調査区南東隅に位置する。SK103・SD071に切られる。遺構東端が調査区外に延び、現状で東西1.2m、南北1.8m、深さ113cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色である。遺物は出土していないが、埋土等から弥生時代の可能性が高いと思われる。

(2) 古墳時代から古代の土坑

SK146 (第22図) 調査区中央東寄りに位置する。平面は楕円形で長径約2.3m、短径1.5m、深さ1.2mを図る。北側にテラスを持つ。古墳時代の可能性がある。

SK133 (第22図) 調査区北東側に位置する。平面は南北に長い楕円形で主軸はN-13°-Eを測る。長径は約1.4m、短径95cm、深さ24cmを測り、断面は浅皿状を呈す。埋土は暗褐色砂で土器片が2点出土した。時期は不明瞭であるが、土色等から古墳時代末～古代の可能性が高いと考える。

SK041 (第22図) 調査区中央に位置する。北側をSD019に切られる。現状で南北91cm、東西110cm、深さ38cmを測る。遺構の南端に長径69cmの角礫があるが、土壌墓の標石の可能性はある。埋土は茶褐色砂である。遺物は出土していないが、古墳時代の可能性がある。

SK103 (第22図) 調査区の南東隅に位置する。遺構の大半が調査区外に延びる。現状で南北239cm、深さ44cmを測る。埋土は褐色砂で須恵器や陶器片が出土した。古代と考えられる。

SK111 (第22図) 調査区中央東側に位置しSK093(近代)に切れ、SK117(弥生時代)を切る。平面は楕円形で長径184cm、短径141cm、深さ82cmを測る。主軸はN-39°-Wで断面は逆台形を呈す。埋土は赤褐色砂質土で須恵器高台付環と土師質破片が出土した。古墳時代後期と考えられる。

(3) 中世の土坑

SK040 (第23図) 調査区中央に位置する。平面は長方形で、現状で長径155cm、幅49cm、深さ50cmを測る。主軸はN-21°-Eで断面は箱形を呈す。埋土は茶褐色砂質土で糸切りの土師破片が出土した。

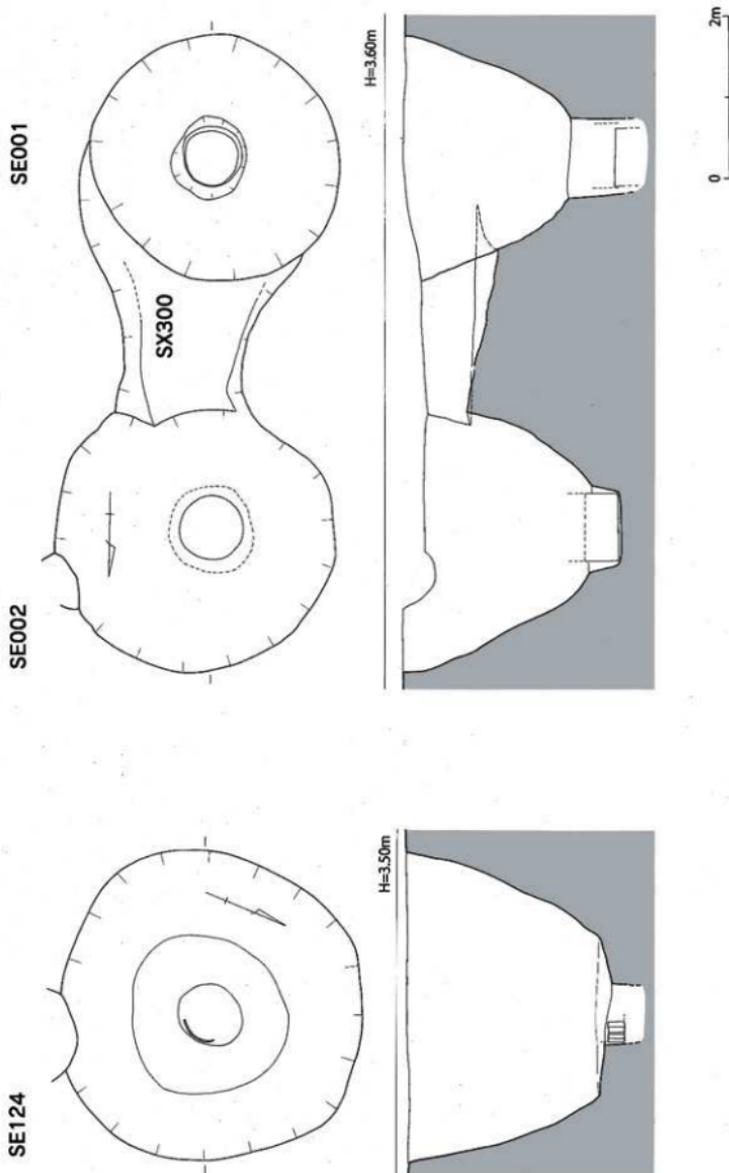
SK155 (第23図) 調査区北東端に位置し、SK153・SK156(中世?)に切られる。平面は円形もしくは楕円形を呈し、現状で南北径116cm、深さ44cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は淡褐色を呈す。遺物は出土していない。埋土等から中世の可能性が高いと思われる。

SK156 (第23図) 調査区の北東端に位置する。SK128に切られる。平面は楕円形を呈し、長径180cm、短径99cm、深さ49cmを測る。底面は南側は平坦で中央から北側に下がる。主軸はN-48°-Wである。埋土は淡褐色を呈し、時期不明の土器片が1点出土した。埋土等から中世の可能性が高いと思われる。

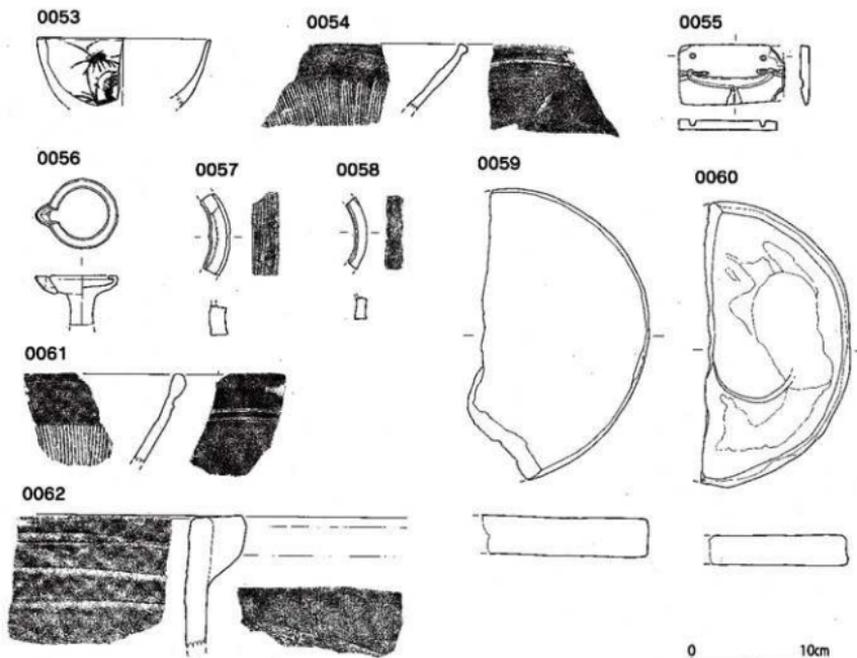
(4) 近世から近代の土坑

SK025 (第23図) 調査区調査区中央西寄りに位置する。I区の南端で検出したが、II区では確認できなかった。平面は南北に長い長方形で北東隅から東側にむけて半円状に突き出す。南北183cm、東西140cm、深さ62cmを測る。主軸はN-7°-Eで断面は逆台形を呈す。埋土は暗褐色砂質土で茶褐色砂を斑に含む。陶器類の他にトチン、サヤ鉢などの窯道具が出土した。

SK037 (第23図) 調査区西辺中央に位置しSK025に切られる。遺構の西側が調査区外に延びる。現状で東西200cm、南北120cm、深さ54cmを測る。埋土は茶褐色砂質土である。陶器類の他にサヤ鉢など窯道具が出土した。



第 24 图 井戸遺構実測図(1/60)



第 25 図 井戸出土遺物実測図(1/4)

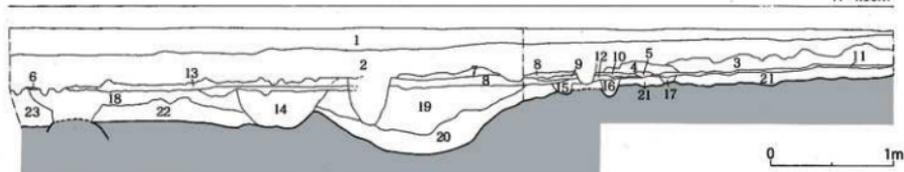
SK061(第 23 図) 調査区南西に位置し 052・059 の攪乱に切られる。平面は不整形を呈し、170 cm × 157 cm、深さ 69 cm を測る。断面は箱形を呈す。埋土は褐色砂質土で窯道具を初めとして磁器、陶器片等が多数出土した。近代である。出土遺物(第 27 図 0063~0066)。0063~0065 は窯道具である。0066 は陶器摺鉢である。今回の調査で多くの陶磁器が出土したが焼け歪みがあるのはこの 1 点のみである。

SK070(第 23 図) 調査区南西隅に位置する。東西に長い楕円形で、西端は調査区外に延びる。主軸は N-75° -E で、長径 1.7m 以上、幅 94 cm、深さ 35 cm を測る。底面中央に径 30 cm、深さ 10 cm の窪みを持つ。埋土から陶器碗の他トチン等の窯道具が出土した。

SK107(第 23 図) 調査区南東隅に位置し、096(現代)・SK106(近代)に切られる。平面は南北に長い隅丸長方形で長径 205 cm、短径 113 cm、深さ 23 cm を測る。埋土は暗褐色砂を呈し、陶器碗等の他に土鏝が 1 点出土した。

7) 井戸 調査区内で 4 基の井戸を確認した。3 基は近世末から近代、1 基は現代の井戸である。SE001 と 002 の間には二つの井戸を結ぶ掘り込み(SK003)がある。003 は 002 と同じ掘り方で SE001 には切られているため SE002・SK003 は SE001 より古くなるが、SK003 は SE002 から SE001 に向かって広がって 001 とほぼ同じ幅まで広がるため、2 基の井戸は単に新掘り替えではなく、何らかの関連があるものと思われる。

SE001(第 25 図) 調査区中央に位置する。平面は円形を呈し、直径 3m を測る。断面は深さ 2m までは漏斗状にすぼまり、その後垂直に掘り下げている。深さ 2.5m で木桶組みと思われる井筒の痕跡を確認した。深さ 2.7m(標高 0.97m)で湧水点に達し、壁の崩落の恐れがあるため掘り下げを中止した。

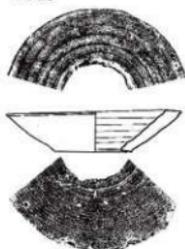


- | | |
|---|---|
| 1. 現代盛土: 砂利 | 13. 黄褐色砂: ガチガチに締まる |
| 2. 現代盛土: 灰褐色土 | 14. 茶褐色砂質土: 締まり悪い |
| 3. 褐色砂: 近代盛土 | 15. 茶褐色土 |
| 4. 暗赤褐色砂質土: 近代盛土 | 16. 褐色砂 |
| 5. 茶褐色砂質土: 近代盛土 | 17. 褐色砂 |
| 6. 褐色砂質土 | 18. 暗褐色砂: 1~3mmの白色細砂を多量に含む |
| 7. 灰褐色砂質土 | 19. 暗茶褐色砂質土: 1~3mmの粗砂を多量に含む SD029 層土 |
| 8. 灰茶褐色砂質土: 褐色砂のブロック含む | 20. 黄白色砂: 堆山の砂がわずかに付いている SD029 層土 |
| 9. 暗灰褐色砂質土: 炭化物を多く含む | 21. 茶褐色砂: 田畑表面 |
| 10. 灰褐色土: 白色粘質土層(1mm前後)を数層含む ガチガチに締まる 築地層 | 22. 暗灰褐色砂: O44 埋土: 062(古濠時代前期小児館)はこの上面から掘込む |
| 11. 茶褐色砂質土: 灰色粘土ブロック含む ガチガチに締まる 築地層 | 23. 暗灰褐色砂質土: 近代盛土土質割り込み |
| 12. 灰褐色土: 粘土粒了を含みガチガチに締まる 築地層 | |

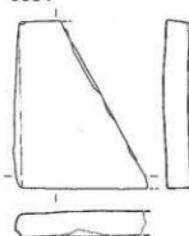
第26図 西壁土層実測図(1/40)

埋土中から近代陶磁器など多量の遺物が出土した。出土遺物(第25図 0053~0055)。0053は染付碗である。復元口径14cm、遺存高5.5cmを測る。釉は僅かに灰色を帯びた白色で紺の濃淡で花文を描く。0054は陶器摺鉢である。暗赤褐色を呈し、胎上には1mm程の白色砂を多く含む。0055は蛇紋岩製の鋳型である。石は長さ8.5cm、幅4.9cm、厚さ0.8cmを測る。全面を研磨して鋳型面として使用しているのは1面のみである。製品は軽くカーブを描く幅8.5cm、長さ7cmの棒状を呈し、先端から内側に釘状の突起がある。投網用の鏝もしくは火打ち金と思われる。図では下側に溝口がり、左右に空気の抜穴が開く。上側には鋳型面を合わせるために棒を差し込む凹みが2カ所みられる。

0063



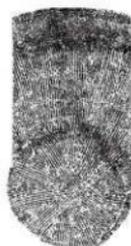
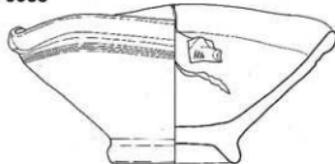
0064



0065



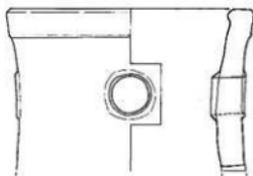
0066



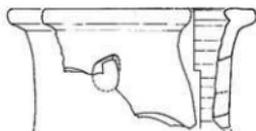
0 10cm

第27図 SK061 出土遺物実測図(1/4)

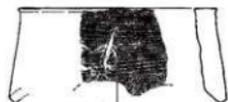
0067



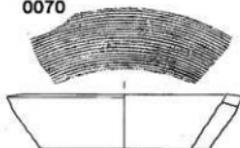
0068



0069



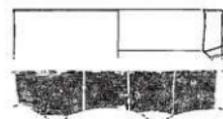
0070



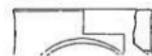
0071



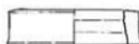
0072



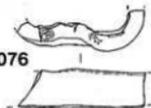
0074



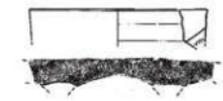
0075



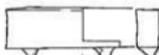
0076



0073



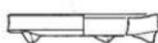
0077



0078



0079



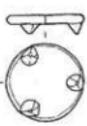
0080



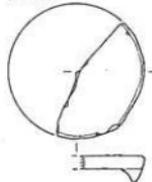
0081



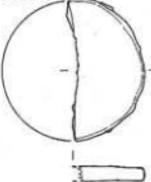
0082



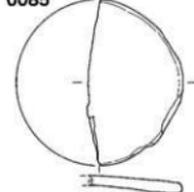
0083



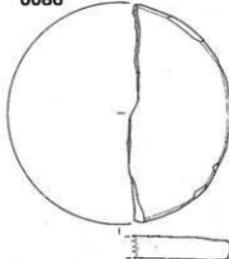
0084



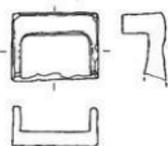
0085



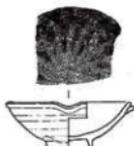
0086



0087



0088



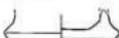
0089



0091



0090



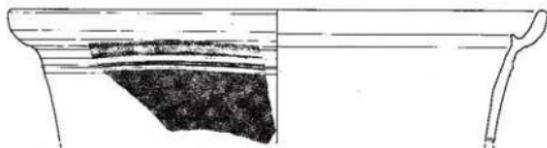
0092



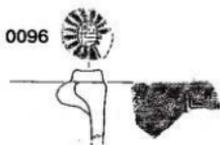
第28図 その他の遺物実測図1 (1/4)

0 10cm

0093



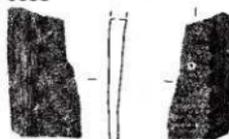
0096



0094



0095



0097



0098



0099



0100



0101



0104



0105



0107



0108



0102



0103



第 29 図 その他の遺物実測図 2 (1/4)

SE002(第 25 図) SE001 の 1.5m 北側に位置する。平面は円形を呈し、直径 3.4m を測る。断面は深さ 2.3m までは漏斗状にすぼまり、その下は垂直に 32cm 掘り下げている。深さ 2.2m で井筒の痕跡を確認した。井筒底面の標高は 0.75m を測る。井筒掘方の埋土には赤褐色粘土を使用しているが、これらは高取焼き関連の廃棄土坑でも出土しているため、井戸が高取焼きの工房に関連して掘られたものと考えられる。陶磁器など多くの遺物が出土した。

SE124(第 25 図) 調査区北東側に位置する。平面は円形で直径 368 cm を測る。標高 1m 付近に平坦面を設け、中央に径 74 cm の井戸枠掘りこむ。深さ 243 cm で木組みの井戸枠が一部出土した。標高 0.68m で湧水点に達したため、掘り下げを中止した。埋土から陶磁器類など多量の遺物が出土した。出土遺物(第 25 図 0056~0062)0056 は燗台である。緑灰色を呈す。0057~060 は窯道具である。0061 は陶器挿針で淡黄褐色を呈す。胎土中に細砂を含む。0062 は陶製の大形針である。小豆色を呈し、胎土中に 3mm 以下の白色砂を多く含む。器壁は厚さ 1.8 cm で口縁に厚さ 2.8 cm の突帯が付く。内面は板状工具による横ナア、外面は突帯が横ナア、その下は縦方向のハケ目を施す。

8) 高取焼き関連遺構と遺物

整地層(第 26 図) 調査区全体で灰褐色と茶褐色質土の整地層が出土した。第 26 図の 7~13 層で標高は調査区中央部で 3.7m、南端で 3.5m を測る。西側の第 32 次調査地点でも確認されている。江戸時代に東側の皿山にあった高取焼きの工房が明治時代に西側に拡大したとされており、本調査区で確認された整地層はその作業面と考えられる。今回の調査では SK055・089・090 等で窯道具と共に多量の陶磁器が出土した。しかし磁器、陶器、素焼きの土器が混在するとともに器種、器形、文様が多

種多様で同じ器形、文様の器はなく焼け歪みなどの失敗例がみられないため、工房などで使用された生活用品と考えられる。今回の調査で出土した窯の廃棄品と思われる遺物は第 27 図 0066 の陶器搦鉢ただ 1 点のみである。高取焼きの窯自体はほとんど調査がなされないうちに破壊されてしまったが、窯近くの整地層と灰原を調査した 35 次調査（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 916 集「藤崎遺跡 17」2006 年）では多量の廃棄品が出土している。

9) その他の遺物

SK089 から陶磁器類と窯道具がまとまって出土した（第 28・29 図 0067～0095）。0067～0086 は窯道具である。製品に合わせて様々な大きさのトチンやハマ、サヤ鉢等が出土している。0087 は石製碗、0088 は陶器製片口搦鉢、0089 は不明土製品で上部に緑釉を施す。0090 は陶器製容器の底部、0091-0092 は素焼きの人形である。0093 は素焼きの甕口縁で復元口径 43.6 cm を測る。黄白褐色を呈し、胎土は精良である。0094 は瓦質の軒平瓦、0095 は陶器製の下ろし皿である。0096～0098 は 096 から出土した。0096 は火鉢口縁で上面に「福」の文字。紅顔外面にスタンプによる文様がみられる。0097-0098 は土製人形である。0097 は後頭部で髪や耳などは付かない。0099 は SE001 から出土した猿の土製品で遺存高は 5.9 cm を測る。淡褐色を呈す。西側にある猿田彦神社に関連するものか。0100 は 118 から出土した。0101 は 025 から出土した小型丸底甕である。0102 は壺小片、甕棺の副葬小甕だった可能性がある。0103 は須恵器環蓋で 072 から出土した。復元口径 21.2 cm、器高 3.6 cm を測る。0104～0108 は土鍾である。0104～0106 はⅡ区南壁清掃時に出土。0107 は 061 から 0108 は 058 から出土した。藤崎遺跡では漁労具である土鍾が多く出土する。北側に浅い博多湾、南側の金屑側河口は当時湿地が広がっており、投網などの漁撈には適した環境だったと考えられる。

4. 小結

今回の調査では新たな方形周溝墓と 32 次で検出した 2 号周溝墓に伴う新たな埋葬施設の出土が期待されたが、残念ながらどちらも出土しなかった。

今回の調査で検出した遺構は弥生時代が甕棺墓 20 基、溝 1 条と土坑群、柱穴遺構群である。甕棺は近代の遺構に切られ遺存状態は不良である。土坑は甕棺に切られる土坑があり、甕棺墓群形成以前に遡る遺構の存在が判明した。SD075 は 22 次調査では出土遺物が少ないことから方形周溝墓の一部と推定していたが、今回の調査で弥生時代中期中頃の甕棺墓に切られていることから弥生時代中期以前に遡ることが判明した。遺構の性格は不明であるが、これより南には中期前半の大型甕棺が分布しないため区画溝の可能性もある。古墳時代の遺構は方形周溝墓の溝と溝の底部で出土した石棺墓、調査区の南端に位置する壺棺墓である。時期はいずれも古墳時代初頭と考えられる。古代は環蓋など遺物は出土するものの確実な遺構は確認できなかった。中世の確実な遺構は 13 世紀の溝（SD019）が出土した。唐津街道に沿うように東西方向に延び、現在 400m が確認されている。今回の調査で注目される点は弥生時代中期の溝の SD075 で埋土は黒褐色を呈す。これまでは弥生時代中期の甕棺埋土は黄白色砂で砂丘の砂と区別がつかず、甕棺掘方の検出は困難であったことから、中期までは砂丘上に表土が形成されておらず、表土が形成されて遺構埋土が黒色土するのは弥生時代後期後半からと考えられていた。SD075 では今まで考えられていたより黒色土化が古くなるため、今後の調査で検討が必要である。



1. I区 (東から)



2. II区 (東から)



1. III区全景 (北から)



2. IV区全景 (西から)



1. I 区墓 chamber 出土状況 (東から)



2. ST004 (西から)



3. ST004 下墓 (南から)



4. ST004 人骨出土状況 (南から)



5. ST010 (東から)



6. ST010 下墓 (南から)



7. ST010 下墓 (東から)



8. III 区全景 (西から)



1.ST013(北から)



2.ST013 (西から)



3. ST014(南から).



4. ST014 下室 (北から)



5. ST014 人骨出土状況



1. ST017(北から)



2. ST017下壘(北から).



3. ST017 人骨出土状況(南から)



4. ST018(西から)



5. ST018 副葬小壘出土状況(西から)



6. ST018 下壘(南から).



7. ST018 人骨出土状況(北から)



8. ST032(南から)



1. ST048(左)・049(西から)



2. ST094(左)・ST095(南西から)



3. ST094(北から).



4. ST094 下壘(北から)



5. ST095(西から)



6. ST095 人骨出土状況(南から)



7. ST099(東から)



8. ST099 下槽(東から)



1. ST104(西から) (2)



2. ST104(東から)



3. ST114 出土状況 (東から)



4. ST114(東から)



5. ST114 下掘方 (東から)



6. ST120(東から)



7. ST120 下面 (東から)



8. ST120 下棺 (東から)



1. ST121(奥側)・ST122 出土状況 (西から)



2. ST121(西から)



3. ST122(西から)



4. ST134・135・142 出土状況 (西から)



5. ST134(南から)



6. ST135(南から)



7. ST135 下壘 (南から)



8. ST135 人骨出土状況 (南から)



1. ST142(南西から)



2. ST142 掘方(南西から)



3. SK062(東から)



4. SK062(西から)



5. SK084(東から)



6. SD029(北から)



7. SD029 土層(東から)



8. SD029 遺物出土状況



1. SD019 東壁土層 (西から)



2. SD019 西壁土層 (東から)



3. SD071(東から)



4. SD075(東から)



5. SD075 土層 (西から)



6. SK061(南から)



7. SK070(南から)



8. SK109 土層 (西から)



1. SK038(東から)



2. SK041(東から)



3. SK111(北東から)



4. SK112 土層 (南東から)



5. SK117(東から)



6. SK118 土層 (南東から)



7. SK119(北から)



8. SK156 土層 (西から)



1. II区西壁土層(東から)



2. II区南側(東から)



3. SE001(西から)



4. SE001井筒(北から)



5. SE002(東から)

報告書抄録

ふりがな	ふじさきいせき 19							
書名	藤崎遺跡 19							
副書名	—藤崎遺跡第37次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1240集							
編著者名	嵐山 祥							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	平成26年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はかたいせきぐん 博多遺跡群 (第193次)	ふくよかしきむらく ふじさきいちりゅうめりほん 福岡市早良区 藤崎1丁目9番	40137	0307	33° 34' 52"	130° 20' 53"	20120610 ～ 20120914	358 ㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
博多遺跡群 第193次	集落	弥生時代～近世	竪穴墓・方形周溝墓・石棺墓・土坑・溝・井戸		弥生土器・土師器・須恵器・貿易陶磁・近世陶磁			
要約	<p>調査地点は博多湾に面した東西方向に長い砂丘の尾根近くに位置する。竪穴墓 20 基、方形周溝墓の溝 1 条、石棺墓 1 基、溝 3 条の他に多数の土坑と柱穴状遺構が出土した。竪穴墓は弥生時代前期後半から中期中頃で尾根に沿って東西 200m、南北 50m の範囲に分布し、これまで約 200 基以上出土している。古墳時代初期の方形周溝墓もほぼおなじ範囲に分布しており、現在 16 基が確認されて、麻瀬から 3 枚、それ以外に 2 枚の青銅鏡が出土している。今回の調査区でも新しい方形周溝墓の出土が期待されたが、西側開削地で出土した 2 枚周溝墓の溝の続きを確認しただけであらな埋葬主体は確認できなかった。溝は弥生時代中期前半と 13 世紀後半、近世～近代の 3 条で、それぞれ 22 次と 32 次でも出土している。土坑は竪穴墓に切られる径 2m 程の大型土坑が 2 基出土したが、竪穴墓より古い土塚墓の可能性が考えられる。近代になると高取焼き窯の作業場になり、廃棄土坑から多数の窯道具が出土した。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1240集

藤崎遺跡19

—藤崎遺跡第37次調査報告—

2014年(平成26年)3月24日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

発行 株式会社月成印刷

福岡市博多区大井2-13-27